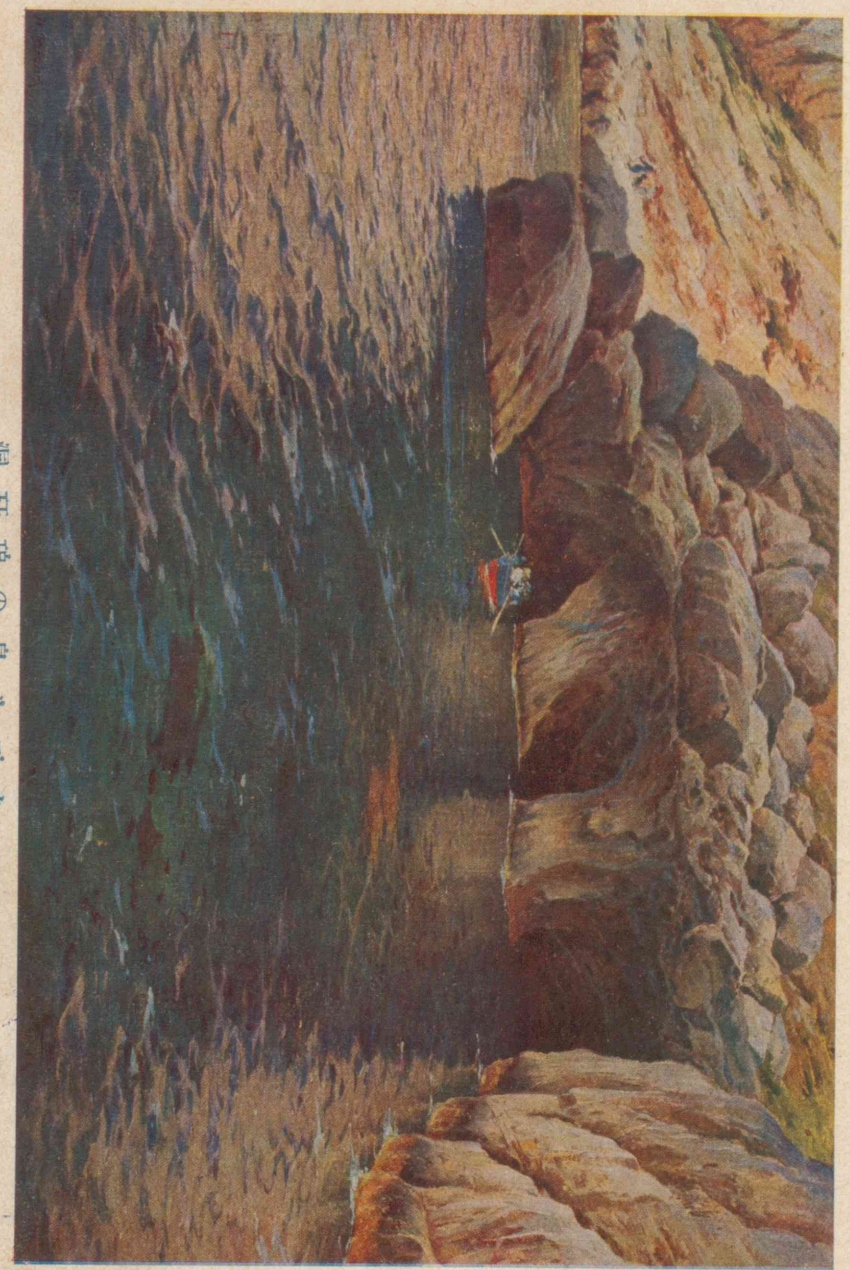
新制女子國語讀本

巻五

46
810
大12

42190
教科書文庫
4
810
42-1923
20000
65484



洞珏瑙の島リアカ

資料室

4b
810
大12

文部省檢定濟

大正十二年一月二十七日　高等女學校國語科用

新制女子國語讀本

開成館編輯所編

株式會社東京開成館藏版

広島大学
教
65484
図書

新制 女子國語讀本 卷五

目次

一 昭憲皇太后十二德の御歌（和歌）……一
二 吉野山……藤岡作太郎……四
三 紅葉山の御養蚕……（週刊朝日）……八
四 皇室奉戴の歡喜……永田秀次郎……一四
五 ライン河とドイツ國民……（傳說のライン）……一九
六 新樹（詩）……服部嘉香……二四
七 伊藤春畝公……山路愛山……二五
八 本能寺の夜嵐……（歷史小品最後の一節）……二八

九　細川忠興の夫人……湯淺常山…三五
一〇　女質の絶對維持……（女性日本人）…三八
一一　崇き理想（詩）……西條八十…四一
一二　新時代の修養……杉森孝次郎…四二
一三　奥村五百子……長谷川時雨…四八
一四　伊勢志摩の海……田山花袋…五三
一五　信仰……釋宗演…六〇
一六　眞人間……吉田絃二郎…六三
一七　睡蓮（候文）……五十嵐力…六九
一八　風鈴……大谷繞石…七四
一九　比叡山……近松秋江…七八
二〇　應仁の暗雲……（歴史小品血煙）…八二

二一　阿新丸　その一……（太平記）…八九
二二　阿新丸　その二……九六
二三　沈默の凱旋式……吉江孤雁…一〇三
二四　小さいものよ……有島武郎…一一三
二五　我が父母……新井白石…一一七
二六　良寛の遺蹟……相馬御風…一二三
二七　旅にある友へ（候文）……樋口一葉…一三〇
二八　カプリ島の風光……濱田青陵…一三三
二九　狂歌（狂歌）……一三七
三〇　櫻町陣屋……横山健堂…一四一
三一　春日局……岸上操…一四七

自修文

一 小泉先生……厨川白村……一
二 來い〳〵螢（童謠）……相馬御風……六
三 東海道中膝栗毛……十返舍一九……七
四 思出の一節……三角錫子……一〇
五 加茂の川原（和歌）……
六 社會奉仕と家庭……乘杉嘉壽……一七
七 鍵の國障子の國……河上肇……二一

新制女子國語讀本　卷五

一　昭憲皇太后十二德の御歌

節制

はなのはるもみぢのあきのさかづきも
ほど〳〵にこそくまほしけれ

清潔

しろたへのころものちりははらへども
うきはこゝろのくもりなりけり

勤勞

昭憲皇太后、御名は美子、明治天皇の皇后、大正三年崩御、御年六十五。

みがかずばたまのひかりはいでざらん
人のこゝろもかくこそあるらし

沈默

すぎたるはおよばざりけりかりそめの
ことばもあだにちらさざらなん

確志

ひとごころかゝらましかばしらたまの
またまは火にもやかれざりけり

誠實

とり〳〵につくるかざしの花もあれど
にほふこゝろのうるはしきかな

溫和

みだるべきをりをばおきてはなざくら
まづゑむほどをならひてしがな

謙遜

たかやまのかげをうつしてゆくみづの
ひくきにつくをこゝろともがな

順序

おくふかきみちもきはめんものごとの
もとすゑをだにたがへざりせば

節儉

くれたけのほどよきふしをたがへずば
すゑばのつゆもみだれざらまし

寧靜

いかさまに身はくだくともむらぎもの
こゝろはゆたにあるべかりけり

公義

くにたみをすくはんみちもちかきより
おしおよぼさんとほきさかひに

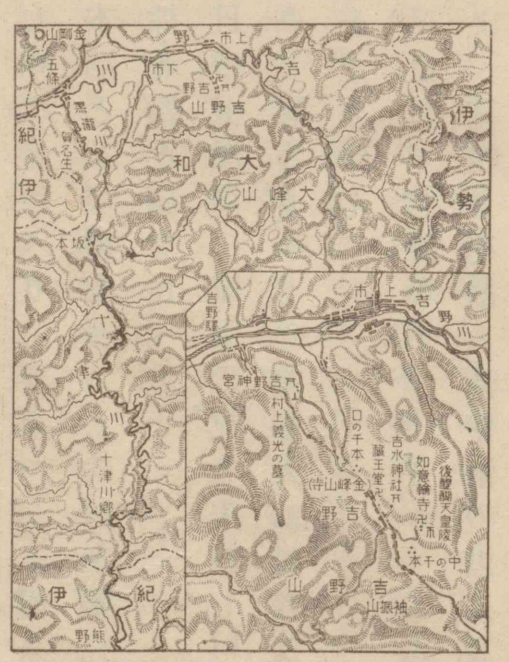
二　吉野山

藤岡作太郎

景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきものの世には多かるに、景色と歴史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無双の名區たる所以なるべし。

抑大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、隨つてこの地も山間の僻地ながらよく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる處、それを都に運ぶには、まづこの地に集めけん。年々に大宮に參りて、毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、このあたりにや住みけん。

世やゝ降りては、虎を野に放つと謠はれ給ひし飛鳥淨御原の帝が世を避けて風雲に乘ぜん勢を養ひ給ひし處。天女が天降り、袖飜し舞ひて大御心を慰め奉りぬといふ五節の舞の起原は、



飛鳥淨御原の帝　第四十代天武天皇。

藤岡作太郎　金澤市の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學文科大學助教授、明治四十三年歿、年四十一。

袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峰を開きたりといふ役行者は熊野より分け入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正はこゝより大峰に分け入りしなるべし。爾來大峰を奥院とし、吉野を本院として、參詣するもの跡を絶たず、金峰山寺の山僧は南都・北嶺と肩を比べぬ。源廷尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは、痛ましけれど勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ失意落膽の時、英雄の涙そもいかなりけん。

その後數世、建武中興の政乱れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定め給ひけるよ。花咲き花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙。かゝるあはれは古に見ざるところ、後の世にもまたありなんや。延元帝の御製に、

役行者　名は小角、文武天皇の頃の人。
聖寶僧正　讃岐國の人、延喜九年(九〇九)寂、年七十八。
南都　奈良興福寺。
北嶺　比叡山延暦寺。
源廷尉　検非違使尉源義經。
兄　佐藤繼信。
弟　佐藤忠信。
延元帝　第九十六代後醍醐天皇。

都だに淋しかりしを雲晴れぬ
　　吉野の奥のさみだれの空

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の蔭に埋め、楠木正行は君に名殘を惜しみて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆることとその後幾度ぞ。運命の寵兒豊太閤は將卒・妻子を率ゐてこゝに豪遊し、盃を擧げ花に對して氣を吐くこと千丈、古の英雄が失敗の迹をや笑ひけん。

大僧正行尊は、花より外に知る人もなし。」と知己の得がたきを恨み、西行法師は、やがて出でじと思ふ身を。」といひて妄語の誹をや得けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記すること、質にして要を得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日

行尊　天台座主、長承四年(一一三五)寂、年七十九。花より外にもろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし(金葉和歌集)
やがて　吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん。
蕉翁　松尾芭蕉。
山陽　頼襄。
益軒が筆　和州巡覽記。
鈴の屋　本居宣長の雅號。

記なども永く人に忘れられざらん。一句にして吉野を盡せるもの、名所としては貞室が、

これは〳〵とばかり花の吉野山

舊跡としては、支考が、

歌書よりは軍書に悲し吉野山

などあり。かばかり名だたる地にして、古人の筆の至れり盡せるを、今更に我等が拙き筆にまた何をかいはん、何をか記さん。

三　紅葉山の御養蚕

皇后陛下が國産御奬勵の御思召の深く渡らせられることは、今更申すまでもないことでありますが、特に蚕業御奬勵

貞室　安原氏、俳人、延寶元年（一六七三）歿、年六十四。

支考　各務氏、俳人、享保十六年（一七三一）歿、年六十七。

皇后陛下　御名は節子、明治十七年御生誕、同三十三年御入輿。

については、私どもこの道に從つてゐるものにとつては、誠に感激に堪へない次第でございます。皇后陛下は、夙に皇太子妃の御時代、即ち明治四十一年に、御養蚕室を青山御所内に御建築なされ、毎年同所で蚕兒を御飼育遊ばされ、大正三年春、更にこれを宮城内紅葉山にお遷しになり、爾來引續き御飼育遊ばされてゐます。私は大正九年春御養蚕助手を拜命いたしまして、四月二十六日から七月二日まで奉仕するの光榮に浴しました。

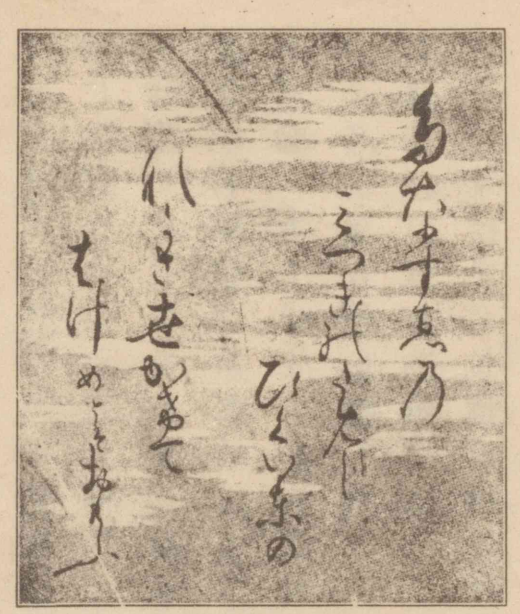
紅葉山は宮城御内庭でありまして、皇后陛下の御散歩地ださうです。その位置は御座所と吹上御苑との中間にありまして、至極高燥で、且周圍が展開してゐますから、養蚕場としては最も適當な場所であります。御蚕室は二階建一棟

青山御所　赤坂區。

紅葉山　德川幕府の頃、東照宮祠や紅葉山文庫のあつたところ。

私　京都高等蚕業學校出身の今村伍一郎。

の立派な建物でありまして、その裏手を剉桑場及び貯桑室に當てられてあります。そして蚕室の右方に御便殿、左方に飼育從業者の宿舍が設けられてあります。



皇后陛下御筆讃

御間取は、階上二室、階下四室で、階下の各室は十五疊敷ぐらゐで、中央の御玄關から向つて左側の二室には、最近の學理を應用した最新式の設備が出來てをり、右側の二室は、普通農家の蚕室を摸せられた土間で、天井も簀子張であります。御使用の蚕具類一式は、一般養蚕家

たなすゑのみつぎのためしひくいとのながき世かけてはげめとぞおもふ

の使用してゐるものと少しの相違もありません。特に蚕箔・蚕筵などは數年來御便用のものであります。

蚕兒の孵化する頃に、御掃立式が行はれます。その日取は、皇室の御都合またはその年の氣候によつて、多少の相違はありますが、およそ五月五日前後に、御養蚕所御便殿で御擧行遊ばされます。大正九年には、五月四日午前十時から御擧行になり、私ども奉仕員一同も參列の光榮に浴しました。陛下には、大森大夫・三室戸・三條両主事及び女官を隨へさせられてお成りになりました。式は和久産巣日神・大宜都比・賣神の二蚕神に種々のお供物を供へ、一對の青竹花筒に新緑の滴る桑葉を捧げ、かくて大森大夫の祭文奉讀が終りますと、陛下は神前に御禮拜遊ばされました。次いで、女官一

大森大夫　大森鐘一、男爵、當時の皇后宮職大夫。
三室戸　當時の同主事、三室戸敬光、子爵。
三條　同主事三條公輝、男爵。
二蚕神　皇后陛下が蚕史をお繙きになつてお選びになつた神。

皇后陛下

同、三室戸・三條両主事、本*多高等蚕糸學校長の禮拜があり續いて私ども一同も奉拜を許されました。一同の奉拜が終りますと、陛下には神前で御手づから蚕兒をお掃立て遊ばされ、桑葉を給せられ、續いて御養蚕主任が蚕種一枚を掃き立てて式が終りました。當日お掃立の蚕種は二十枚で、品種は日本種・支那種・ヨーロッパ種(Europe)及び交雑種、合計蟻量二十五匁でありました。

飼育中、一二齢の間は曇天・雨天が打續いて、育蚕上非常に苦痛を感じましたが、蚕種が優良なのと、良葉が潤澤だつたのとで、蚕兒は順調に成育しまして、病蚕などは少しも發生しませんでした。御使用の桑葉は、宮城本丸に六段歩、青山御所内に五段歩餘栽培せられてありますが、いづれも非常に

*本多校長　東京高等蚕糸學校長本多岩次郎。

よく繁茂しました。

御産繭は年々東*京高等蚕糸學校にお送りになり、同校製糸科で全部繰糸すると承つてゐます。なほまた、大正六年以來、陛下の御思召で、同校教婦養成科生徒數名が、短期間御養蚕所に奉伺して、繰糸の實況を御覽に入れてゐます。

陛下は廣く斯業に關する圖書・雜誌を御熟讀遊ばされ、なほ養蚕期中は度々御養蚕所にお成りになり、壯蚕期に入れば、晴雨の如何に係らず、毎日必ずお成りになつて、給桑・除桑・熟蚕上簇のことなど悉く御躬ら遊ばされます。陛下には御養蚕所の蚕兒を御覽遊ばされるばかりでなく、御居室にも若干の蚕兒を御飼育遊ばされて、絶えず御養蚕所の蚕兒とその成育の經過を御比較あらせられるなど、その御熟心な

東京高等蚕糸學校　東京市外瀧野川町大字西が原。

ことは申すさへ畏れ多い次第であります。（週刊朝日）

四　皇室奉戴の歡喜

永田秀次郎

大正十一年四月、*英國皇太子殿下の御來朝を迎へ奉つて、我我は今更のやうに一國民として皇室を奉戴するの歡喜と矜誇を感じたのだつた。世界戰爭の前後に於て、支那に革命があり、續いて露のロマノフ家、獨のホーヘンツォルレン家、墺のハプスブルグ家などが將棋倒しに傾覆した。當時米國大統領*ウィルソン氏は、この大戰を目して、*デモクラシーと*ミリタリズムの戰爭だと大呼したが、その聲は帝政に對する共和政の勝利を叫ぶかのやうに感じられた。然るに、この際に於て、我が國民に百万の援兵を得たやうな

永田秀次郎、兵庫縣の人、明治九年生、東京市助役、貴族院議員。
英國皇太子、大正十一年四月御來朝せられた。
ウィルソン、當時の米國合衆國大統領。
デモクラシー、民主主義。
ミリタリズム、軍國主義。

仁裕

大正十年五月十七日

皇太子殿下御筆蹟

心地を與へたものは、實に英國皇室の存在並にその國民の尊皇心だつた。當時滔々たる世界思潮の暗流中に處して、大英國民は恰も狂瀾の中に立つ巨巖のやうに、儼乎として動搖せず、冷然として新思潮を蔑視し、昂然として「英國は英國である。」と高唱してゐた。由來英國人は「遲緩ではあるが堅實である。」と稱されてゐる。我々はそこに英人の偉大性を認めて、これを讃美せずにはゐられない。かの邯鄲に歩を學び己が歩を忘れて路傍に匍匐するの徒は、深く反省せねばならぬ。

我々は英國人の尊皇心に關して、*ローズベリ

ローズベリー、英國の政治家伯爵、前內閣總理大臣。（1847～）

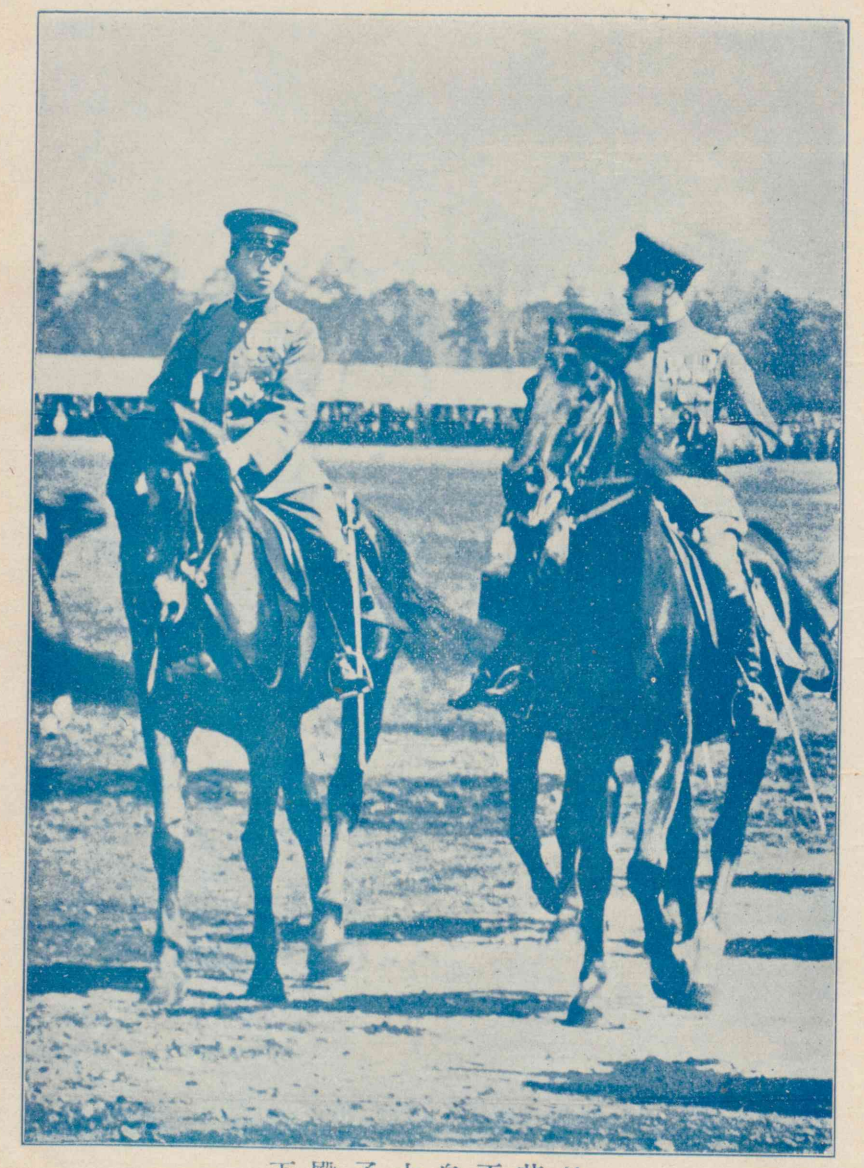
ー卿のいはゆる「國民は軍隊の如く、皇室は軍旗の如し。」といつた比喩に、最も深く感動するものである。この一語は極めて雄辯に英國人の自尊心と尊皇心との調和を説明してゐる。英國人にこの自信があるために、大戰中の試練を經て、國民と皇室との親和が愈〻緊密を加へたのである。我々は我が日本國民の自尊心と尊皇心との調和に對しては、この比喩を以て滿足せず、「國民は圓周の如く、皇室は中心の如し。」と提唱し、以て両者不可分の關係を説明したい。そしてこの両比喩の間に自ら籠るところの彼我國民性の異同には、實に趣味津々たるものがあると思ふ。

ヴィクトリヤ女王

英國は近代に於て*ヴィクトリヤ女王・*エドワード七世、並に現皇帝ジョージ五世陛下を通じ、英明の君主が相次いで君臨され、殊に今回御來朝のプリンス、オヴ、ウェールス殿下が聰慧であらせられるから、英皇室は彌が上にも國民の信望を蒐めてゐられる。その事情は、また我が國の近代に於て、明治大帝から現陛下に及び、殊に*攝政宮殿下の御賢明に對して、國民の信頼・歸服の洵に絶大であるのに酷似してゐる。我々もまた「日本は日本である。」と考へてゐる。尊皇心については、毛頭も英國を羨むべき理由がない。英國人は宜しくその皇室を無上のものと考へてよい。我々はまた我が皇室を無上のものと考へてゐるのである。

ヴィクトリヤ女王（1819—1901）
エドワード七世（1841—1910）

攝政宮　大正十年十一月二十五日攝政御就任。



日英兩皇太子殿下

さて、我々が最も欣快に感ずることは、日英両國民は各、その皇室を奉戴する上に於て、互に十分の理解と情熱との上に立つてゐることである。　我々には、共和政治を行はねばならぬ國民は、皇室に對する理解と情熱とを持ち得ない不幸な國民であるとしか思はれない。　かの不姙の女を見よ、己が掌中の玉ともいふべき愛兒を持つ歡を理解しないで、僅かに雛人形を抱いて自ら慰めてゐるではないか。　共和國民は國民のシンボル(Symbol)たる皇帝を戴くの歡喜を理解しない、圓周の中心たる皇室を戴くの悅樂を會得しない。　たゞ僅かに一定任期のある大統領を選出して、以て自ら慰めてゐるのに過ぎないのである。　古人(*)の句に、「石女(うゑずめ)の雛かしづくぞあはれなる。」とあるが、我々は共和國が期限付の主權者た

古人　服部嵐雪。

る大統領を戴く有樣を見て、これ恰も石女の雛に冊くのと同一であると思はれて、一種の憐憫を感ぜずにはゐられない。こゝに於てか、我々は英國人とともに、大なる誇を以て共和國民にいつてやりたい、「君達は皇室を戴く愛情を味ふことを知らぬ誠に氣の毒な國民である。」と。

五　ライン河とドイツ國民

神祕の霧に鎖された太古の世に、原始の人類を誘つて文化の創業をさせたものは實に河川である。人類最初の文化の華が爛漫と咲き出た舞臺は*ニール(Nile)の三角洲である。恒*河の流れるところ、古代印度の深奥な哲理が生れた。ローマ*(Rome)帝國が歐洲の暗黑を破つて一大炬火を揚げたのは、タイ(Tiber)

ニール　アフリカの大河、地中海に注ぐ、長さ約一四〇〇哩。
恒河　ヒマラヤ山に發しベンガル灣に注ぐ、長さ一六八〇哩。
タイバー　イタリー第二の河、長さ二六〇哩。

バーの河畔である。ヨルダンの流には、抑〻いくその聖者が禊して、「天國は近し。」と叫んだことだらう。この他にも、バビロニヤのチグリス・ユーフラト、支那の黃河・揚子江、或はセイヌ・テームスなど、史上にその名の高い河流は擧げて數へるに遑がないほどである。しかも、なほドイツのライン河ほどに深刻な印象をその國人の腦裡に留めてゐる河は、恐らく他にはあるまい。

ライン河はドイツの國境であり、ドイツ文化の中心地であり、またドイツ民族の搖籃でもある。ドイツ魂はラインの名を聞いてさへも震ふといふ。「ラインの守」の國歌は、常に祖國の子等の心臟に熱い血を沸かさせずには措かないのである。ドイツ國民が衷心深い殿堂にラインを祀り上げて愛國の守護神とするのも、決して由來のないことではない。その昔、ゲルマン族の祖先がこゝに足懸を得て以來二千年、流の絶えないラインの岸は、一塊の石、一木の蔭でも、悉く昔時を回想させる種でないものはない。幾星霜を苔に古りた古城・伽藍の廢址は物こそいはないけれども、中世の信義に厚い武夫の俤を今の世に彷彿させてゐるのである。

曾て鐵血宰相ビスマークが一大軍備擴張案を議會に提出して、頑強な

ヨルダン　パレスタインの河、死海に注ぐ、長さ二〇〇哩。

バビロニヤ　またバビロン、西暦前二二〇〇年代頃の創立。

チグリス　アジヤトルコの大河、長さ一一五〇哩。

ユーフラト　アジヤトルコの重要な河、チグリスと合してペルシヤ灣に注ぐ、長さ一六〇〇哩。

黃河　支那第二の河、長さ二五〇〇哩。

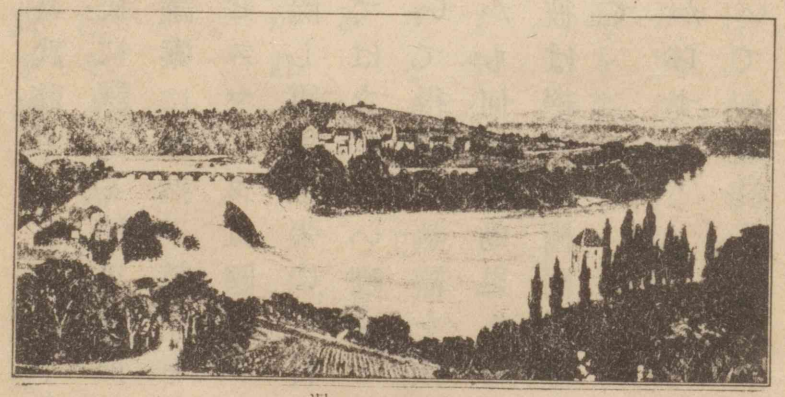
揚子江　支那第一、世界第四の河、長さ三〇〇〇哩。

セイヌ　佛國の河、イギリス海峽に注ぐ、長さ四八〇哩。

テームス　英國の河、北海に注ぐ、長さ二二八哩。

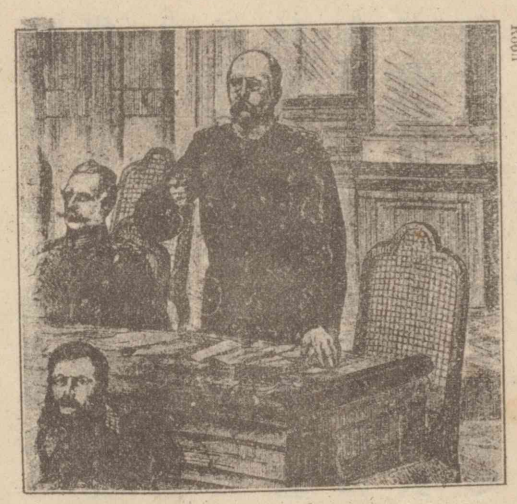
ライン　ドイツの河、北海に注ぐ、長さ八一〇哩。

ビスマーク　ドイツの政治家。（1815—1898）



ラインの瀑

反對を受けたことがあつた。その身武將であるモルトケ*ローン等さへ、あまりに重い稅を國民に課する結果を怖れて、この議案に斷然不贊成を唱へた。ビスマークは國家多事の秋に際し、軍備擴張の一日も忽にしてはならない理由を諄諄と說いて、得意の熱辯を振つたが、しかも何等の効果もなかつた。彼は絶望の極、両手を高く捧げて、



クーマスビの中說演て於に會議

「噫、神よ、我等は軍隊を有せざるべからず。」

と叫んだ。この悲劇的な歎息を聞いても、議員等は依然と

*モルトケ　ドイツの元帥。(1800—1891)
*ローン　ドイツの陸軍大將、政治家。(1803—1879)

して馬耳東風、一向彼の窮境に同情しようともしなかつた。その時、ビスマークはなんと思つたか、突然態度を改めて立上り、いと嚴かに「ラインの守」の一節を高誦した。

劍戟の響　怒濤の叫
雷轟くをたけびの　聲を聞かずや
ライン　ライン　ドイツのライン
神聖なる流を　今誰か守る
愛する祖國よ　とはに安かれ
子等は固く　守れり
固く守れり　ラインを

喧囂を極めた議場は忽ち水を打つたやうに靜まつた。議員等はやがて熱狂して彼の吟誦に聲を和した。かくてビ

スマークの一大軍備擴張案は、滿場一致の贊成を以て、無事議會を通過するを得たのであつた。

あゝ、ライン河はドイツ國民の頭上に、實にこのやうな魔力を振ふものなのである。（傳說のライン）

六　新樹

服部嘉香

すくやかに新しき草のにほひ
えちごのみかやける世界に
日光を甘くまたらる
ひかり言く澄みたる大空に
あゝひばり出でー　爆音

服部嘉香（よしか）　東京市の人、明治十九年生、文學者。

飛行機を輕快に近つき來り　遠ぎかる

家庭のたそがれ
テーブルに集りてコーヒー飲みぞ
皿にコップにさゝやかに青きゆ反射

山路愛山

七　伊藤春畝公

つらく春畝公の一生を考ふるに、まづ長州といふ良き學校にて人物鍛錬の修行をなし、日本國が世界の舞台に乘り出し、國民として英雄的の活動をなしたる時期に、その進歩の標識ともなり、案内者ともなり、遂にその生命を日本國民將來の問題たる世界經營に捧げたるものなり。

テーブル　英語 Table.
コーヒー　英語 Coffee.
コップ、　英語 Cup.

山路愛山　名は彌吉、舊幕臣、文章家、大正六年歿、年五十四。

春畝　伊藤博文、山口縣の人、明治時代の大政治家、明治四十二年歿、年六十九。

泰西人の人物評論は、アジヤに對しては、英雄を大きくし人民を小さくする傾あり。今日にても、彼等の評論を見れば、伊藤公は新日本を造りたるものなりとやうに說くもの多し。されど、人類は一なり、歷史の法則もまた一なり。公は日本國といふ畑の產物にして、公が日本國を造りたりといはんよりも、むしろ日本國が公を造りたりといふの眞なるは、なほ泰西の英雄豪傑が悉くその國その時代に造られしものなるに同じ。さるを、新日本は公によりて造られたりといはば、これ眞に諛評のみ。

たゞ公は、日本帝國が始めて世界の競爭場裡に乘りこみし時、その最も聰明なる部分の思想を代表し、その最も愛國的建設的政治家の先頭に立ちたるものなるのみ。

日本國民の進步は、その政治家の進步よりもむしろ速にして、多くの英雄豪傑は國民の急速なる進步に對し、危殆の情を以てこれを待ち、或は自ら國民の進步を呪詛し、好んで時勢の後に落ちたるものもなきにあらざりき。獨り公はよく時勢とともに進みたり。その長州の士たりしや、長州人士中にありて最もよく長州の位置を解したるものの一人は公なりき。幕末の志士が新日本の政治家として廟堂に立つや、最もよく日本人民の性情を解し、その前途を洞察したるものは公なりき。公はこの故に

伊藤博文

日本帝國に憲法政治を施すの皇謨を翼賛したり。憲法既に開け、日本帝國の内治略〻緒に就くに當りて、最もよく帝國の世界に於ける使命を解し、國は獨り自らその生命を保つて以て滿足すべきものにあらず、この國を世界の大なる要求に捧げ、日本帝國を以て全人類の福祉を進むることに努力せざるべからずとの道德的大責任を感じたる政治家の一人もまた實に公なりき。

公は日本國民を樂觀し、時代を樂觀し、急激なる進歩を樂觀し、常に國民的進歩の最前列に立ちたりき。日本國民の公に感謝すべきもの實にこゝに在り。

八　本能寺の夜嵐

本能寺　この時は京都

千生瓢の馬印を朝日に高く煌かせ、莞爾として西を指した猿面冠者が鋒の鋭さ朝に一砦を拔き、夕にまた一城を陷れて、中國は見る〳〵馬蹄の塵よと見えたが、毛利の運命を背負つて立つた高松城が、地の利に據る勇將猛卒の防禦の固さに、勝に乘つた勢も頓に弛んで、流石の秀吉もたゞ迂遠な水攻の外に策の施しやうもなかつた。その中に、名に響いた吉川・小早川の両雄が自ら大軍を率ゐて向ふと聞くや、急使は京都に飛んで連りに援軍を求めた　信長の血は涌き立つた。「しをらしき毛利が少年等よ。いでや、目に物見せてくれうず。」と、まづ池田紀伊守父子・惟任日向守・高山右近等を打立たせた。そして自らも右大臣の衣冠をかなぐりすて、出陣の命を傳へて、手兵とともに本能寺に宿つたのは、天

六角南油小路東にあつた、今は寺町通押小路南にある。

高松城　岡山縣吉備郡にあつた、當時の守將は清水宗治。

吉川・小早川　吉川元春と小早川隆景。

池田紀伊守　池田信輝。

惟任日向守　明智光秀。

高山右近　右近大夫高山長房。

正十年六月一日であつた。

錦帳深く鎖し蘭燈影淡き時、彼は何事を夢みてゐたらうか。

安土城の春の夜の宴、青海の波を敷いたやうな千疊の大廣間にずらりと居流れた大紋・立烏帽子。毛利もゐる、島津もゐる、北條も伊達も長曾我部もゐる。天下の群雄悉く我が前にひれふしてゐる。漆黑の髯を逆手に撫で上げつゝ蛇眼空を睨んで長光寺の籠城を語る勝家、赤い顏を一入赤くして近く打立つべき大明征伐を豪語する秀吉。やがて、幸若か舞ふ御代万歳の一手に、廣間の銀燭が皆一齊に煌き立つと、花の吹雪が長廊

織田信長

安土城　滋賀縣蒲生郡安土村にある織田信長の守城。

長光寺の城　滋賀縣蒲生郡蒲生佐村の西にある柴田勝家の守城。

幸若　桃井幸若丸直詮の創めた幸若の舞を舞ふ役者。

の朱欄に乱れて、廻る杯にも花片がひら〳〵と舞ひこんで來る。

「殿、殿、大事でござりまする。」

ふと眼を覺すと、たゞならぬあたりの氣色。何事ぞと枕を欹てる時、

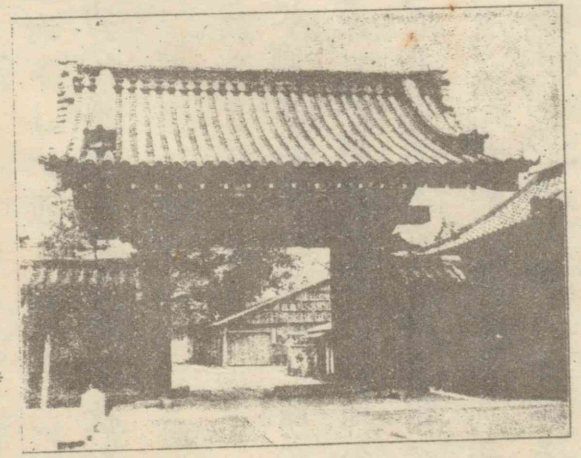
「惟任日向、謀逆と相見えまする。」

信長はがばと跳ね起き、太刀片手に廊下に走り出た。曙の空には上弦の月が淡く懸つてゐる。見渡せば、彼方の地平線から赤い土煙が舞ひ上つて、どこからともなく涌き出で搖り寄せる人馬の音とともに、見る〳〵間近く寄せた先手の軍勢、打物の影がほのかに閃いて、未明の光に翩々と飜る旗幾旒。諦視すれば、咄、紛れもない水色桔梗の旗標である。

瞳を定めてきつと見てあれば、追手は六角油小路、搦手は西の洞院かけて犇々と引包み、明智左馬助光俊が三千餘騎は揉みに揉んで押寄せる。顧みれば、味方は數へるばかり。誰かこの大變を期し居らう。

「あれ、どうせうぞ、あれあれ。」

女房どもの泣き叫び周章て惑ふ中を、栗梅の越後上布に鶴の丸を大小散し、紅梅練の大口のそば高くとり、太刀の鞘を拂つて君の御前に引添うたのは、森三左衛門尉が二男蘭丸であつた。



現時の本能寺山門

明智光俊　一に光春、光秀の從父弟。

森三左衛門　名は可成。

逆さまに降る焔の雨、横樣にしぶく血潮の風、矢叫の聲、打物の音、忽ちに一場の修羅の巷は現出した。信長は五人張の滋籐の弓を滿月の如く引絞り、矢を番へ〳〵、見る間に十數騎を射倒した。ひようと飛んで來た矢はぶつりとその弦を切つた　信長は苛つて弓を投げ捨て、「槍を持て、槍を。」と叫んだ。聲とともに鎌十文字の鞘を拂つて捧げたのは間部六郎大夫の妹であつた。信長は白綾の單衣を焔と血潮とに彩らせて、忿怒の形相凄じく、阿修羅王の荒れたやうに、その槍を突き立て〳〵したが、再び飛んで來た矢はぐさと右の肘に立つた。

今ははやすべきやうもない。顧みれば、小川愛平・金森義入・魚住勝七など、侍衛の臣も皆斃れた。身邊は悉くこれ火・血・

矢・白刃・黒煙。あゝ、我が事は終つた。

信長はからりと槍を抛つた。そして眦を裂いてきつと寄手の勢を睨んだ。

「おのれ、おのれ、おのれ日向が振舞よな。」

「殿、御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかゝり給はば、末代までの御恥辱にて候。某御跡引受け候。彼方に御入りありて御腹召させ候へ。」

戰ひ疲れた蘭丸が深傷・淺傷に打喘ぎつゝかくと諫めたので、信長は書院の方へと引退いた。が、その影の、焔の光で紙障子に映じたのを目當に、敵の一卒が突き出した槍の穂先に、ぐさと脇腹を貫かれて斃れた。

蘭丸は弟坊丸・力丸とともに眼覺しく戰つて、君の御後を追ひ奉つた。

あはれ、信長が功業はぱつと咲いた櫻の花のやうに華々しかつたが、その末路もまた夜半の嵐に散る花のやうにはかないものであつた。（歴史小品最後の一節）

湯淺常山

九　細川忠興の夫人

細川忠興の北の方は明智光秀の女なり。父謀反の時、忠興に向ひて申しけるは、「父ながら、かゝる企事よくあるべしとも思はれず。瀧川・柴田など申す人々多ければ、必ず軍敗れ候べし。女の淺き智慧にも口惜しくこそ存じ候へ。男の身ならんには、鎧の袖にすがりても諫め申すべきを、力なし。君若し與せさせ給ひなば、世の譏いかでか遁れさせ給はん。」

湯淺常山　名は元禎、德川末期の儒者、岡山藩士、天明元年（一七八一）歿、年七十四。

細川忠興　藤孝の子、信長・秀吉・家康に歴仕した、正保二年（一六四五）歿、年八十二。

北の方　光秀の第三女、容貌殊に美、ヤソ教の信徒となつてガラシヤといふ、慶長五年（一六〇〇）歿。

瀧川・柴田　瀧川一益・柴田勝家。

と、涙に沈まれしかば、忠興、光秀に同心なかりけり。

その後程經て、石田、西國の諸將を語らひて兵を起す時、諸大名の北の方を大阪城中に取入れんとするを、北の方聞きて、傅に付けられし河喜多石見・稻留伊賀・小笠原正齋を呼びて「我こゝを出でんこと思ひも寄らず、城中に取籠められんは恥辱なり、よく斷を申し候へ。なほ聞き入れられずばこれを限りと思ひ定むべし。」と語られしかば、正齋「殿、東國に向はせ給ひし時、『思ひかけざることのあらんには、正齋計らひて、武將の恥な晒しそ。』と仰せおかれ候ひき。敵若し奪ひ取らんとするならば、その時思召し切らせ給へ。」といひけり。

かゝるところに、「城中に入れよ。」と使を以ていはせしかば、再三斷の旨を述べけれども聞き入れず。七月十七日の未の

石田　名は三成。

七月十七日　慶長五年。

刻ばかりに、大阪の軍兵五百餘、玉造口の屋敷を取捲きて、「疾く城中に入れ申されよ。さらずば乱れ入りて奪ひ取らん。」と呼はりけり。女房ばらあわてて泣き悲しめども北の方は騒ぐ色もなく、「かくあらんとはかねて思ひ設けつることぞ。正齋、介錯せよ。我生ける世にまみえざりし人々に、死しての後も見られんは快からじ。」とて、面に覆面打掛け、括袴着て、刀を抜き、胸に突き立てたりければ、正齋、眉尖刀にて介錯し、そのまゝそこにて腹を切らんとせしところに、正齋が小姓走り來り、「北の方と同じ處に自害あらば、後の謗も候べし。」といひければ、正齋「あまりの痛ましさに忘れたるよ。」とて、障子の外に走り出で、家に火を懸け、石見とともに腹切りて、炎の中に死にたりけり。

未の刻　今の午後二時頃。

玉造口　大阪城東南口

さて、北の方はかねて形見とや思ひけん、手ずさみのやうに書き捨てて、硯箱の中に入れおかれし歌あり、

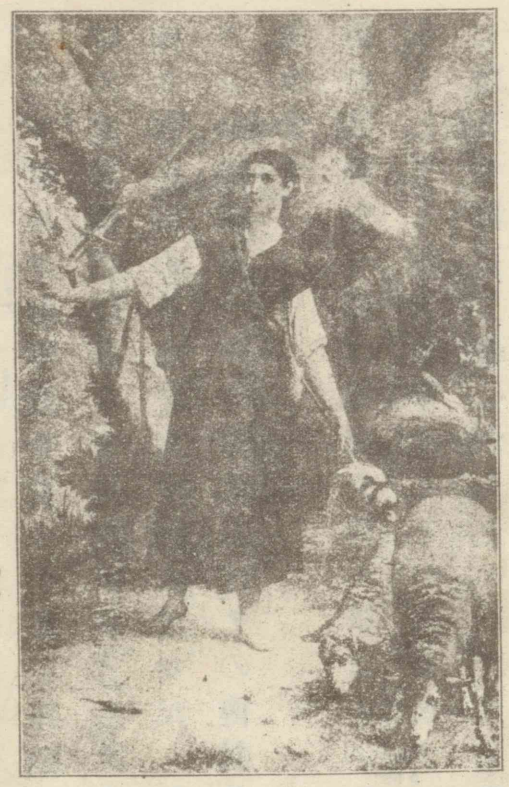
先立つはおなじ限りの命にも
　まさりて惜しき契とぞ知る

後に至りて取傳へて世に殘りぬ。

一〇　女質の絶對維持

女性が教育を受けたり職業に就いたり社會運動に從事したりしますのは、人として向上するがためであつて、男性になるがためではありません。男女の區別は必然の關係から生じたものであるから、女性はどこまでもその天賦の女質を維持せねばなりません。

男女は人として共通し、且同樣に行ふべきことが多いにしましても、男が折角男に生れて男らしくするを要するやうに、女も折角女に生れて女らしくするを要します。



ジャンダルク
レノッブヴァン筆　バンテオン殿堂壁畫

女が女らしくするのは卑屈でなく因循でなく時代後れでなく、天から賦與された性格を以て、最も適當に生存することを意味します。女分の多い男があり、男分の多い女が

ありそのの傾向は境遇によつても違ひますけれども、性に基づく特質は務めてこれを維持助長せねばなりません

*ジャンダルクが甲冑を被つて馬を陣頭に躍らせたのは、天晴の武者振ではありましたけれども、その死に臨んで、髪を梳り容を治めるなどさすがに處女だと思はれました。ジャンが變成男子だつたならば、その傳記の大部分は興味を失ひます。

男の眞似をせねば能力を伸し得ぬといふ理由はなく、女らしくしても能力を伸すことが出來ます。學問を修め、職業に就き、世間に立働くからといつて、生來の女質を幾分でも失ふのは、女たるものの恥辱です。（女性日本人）

*ジャンダルク　J'anne d'Arc　佛國が英國と戰うた時オルレアンの圍を解いたフランスの女傑。（1412—1431）

二　崇き理想

西條八十

女性の愛は空行く月
圓うに射して世を照せ
恵めよ、いろき愛を

女性の美は高嶺の雪
永劫に輝きけど知らず
守れよ、清きみさを

女性の威は帛透く薔薇
靜かに見えて人をさます

西條八十　東京市の人、明治二十五年生、文學者。

育てよ〳〵潜むつよさ
女性の希望(のぞみ)は草間の水
ちろ〳〵流れ遠海へ注ぐ
弱めよ〳〵遠きのぞみ
女性の理想(かしひ)を我へ〳〵に
歌ひて分日はさきく生きん
祈へよ〳〵崇(たか)きちから

一二　新時代の修養

杉森孝次郎

人類の生活を大別すると、經濟的と文化的との二つになる。

杉森孝次郎、靜岡縣の人、明治十四年生、早稻田大學教授。

そして今日の文明諸國民の經濟的生活は、既に甚しく國際的になつてゐる。貿易が即ちこれを證明する。今日の製造家で、その原料を國内だけから仕入れることが愛國的必要だと心得てゐるものはない。日本ならば、鐵や棉をアメリカ(America)及び印度から輸入する。また製作品を賣るに當つても、自國民にだけ供給することが愛國的必要だと心得てゐるものもなく、誰も世界の隅々(すみ〳〵)にまで賣り擴めようとする。また一個の消費者即ち普通の買手にしても、自國の製品でなければ買はないといふことが、愛國的必要だと心得てゐるものもない。要するに、經濟的生活は世界的になりつゝあるといふ事實が發見される。

轉じて、文化的方面を見ると、世界主義の發現は一層顯著だ。

イギリスのジェンナー(Jenner)が種痘法を發見すると、戰時中のドイツ人も平氣でこれを實行した。またドイツのレントゲン(Röntgen)がX光線を發見すると、英佛の負傷兵も安心してそのお蔭を蒙つた。一國の學者が新學說を發表し、一國の藝術家が新創作を發表すると、その學問上の友人と藝術上の知己とは、國境に拘らず、地球の東西南北に簇出する。

始めて種痘を試みるジェンナー

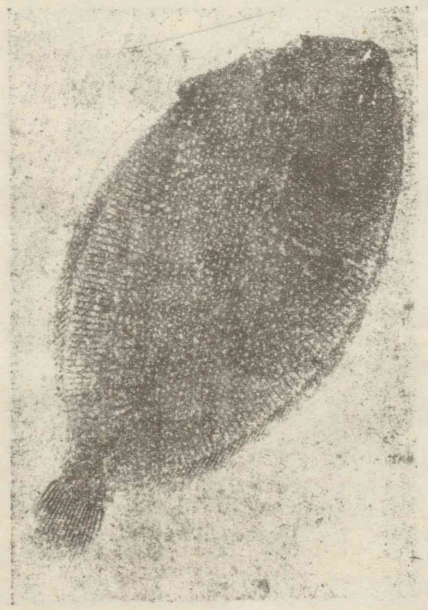
ジェンナー　英國の醫師、牛痘接種法の發明家。(1749—1823)

レントゲン　ミュンヘン大學教授、X光線の發見は1895年。(1845—1923)

かくの如く、經濟的生活と文化的生活とが世界的になりつつある時代に於て、吾人の道德思想だけが鎖國的または排外的であつてよいはずはない。自己發展・自國發展のためにも、世界に貢獻する意志が國民各自の事業や行動の根柢に儲在してゐることを最も必要な條件とする。國內の惡を世界の公惡として除斥し、國外の善を世界の公善として助成する誠意がなくてはならない。自國民ならば道德的に劣惡であつても優遇し、他國民ならば道德的に優勝であつても虐待するといふ方針は、各國ともにこれを改める必要がある。

レントゲン

しかしながら、言語が異り、血縁が遠く、風俗・習慣及び歴史を共通にせず、居住地域が遠隔であるといふ事實がなほ今日の程度に於て存在する限りは、遽に國際主義の直接實現を企てることは無理である。現に經濟生活を見ると列國とも保護主義を執つてゐる。この保護主義即ち関税制度の現存すること、とは、列國がいづれも自國本位主義を執つてゐる證據である。歐洲戰爭の原因・經過及び戰後の實狀を精査すると、いかに自國本位主義が世界主義より



X光線寫眞（鯛の骨格）

も優勢になつてゐるかが解る。この自國本位的傾向と世界主義的傾向の両者を完全に支配することは、今後の各國民の要務である。人間は理性の外に欲望をも情愛をも恐怖心をも有つてゐる。この人間の本性の全體を組織的に支配することは、個人として世に處し人と交際する上に於ても、また國家として世界の各國と立交る上に於ても、ともに必要である。

要するに、個人についていへば、各自が強い善人になること、勇氣ある知者になること、人道的聖志のある英雄豪傑になることが、新時代の修養の要件であり、國家についていへば、自國をして隣國・他國・世界列國にとつて有用で必要な國にならせることが、新時代の愛國の要義である。

一三　奥村五百子

長谷川時雨

奥村五百子は南清視察にいつたことがある。その用向は、本願寺の布教事業を助け、その傍、支那の上流婦人と接觸する機會を得るためだつた。その幹旋者は舊藩主小笠原子爵や近衛公爵や長岡將軍などだつた。五百子は氣管支カタルの持病を持つ身とて、この旅行には藥瓶を提げてゐた。

句佛上人大谷光演師は、

栴檀の枯れても殘るかをりかな
散りてこそ我が日の本の櫻かな
散る時が浮ぶ時なるはちすかな

と餞け、小笠原子爵は、

長谷川時雨　名は藤子、明治十二年生、東京市の人、文學者。
奥村五百子　佐賀藩の人、愛國婦人會創立者、明治四十年歿、年六十三。
本願寺　こゝは東本願寺、眞宗大谷派の本山。
小笠原子爵　名は長生、舊唐津藩主。近衛公爵　名は篤麿。
長岡將軍　名は外史、陸軍中將。
大谷光演　眞宗大谷派管長。

行けよ君すめら御國に照る月は
から山かけて澄みわたるらん

麗しい緋天鵞絨の信玄袋を贈つた下田歌子女史は、袋へ、

日の本のまことの種子をもろこしの
原にも植ゑよ大和なでしこ

と書きつけた。その頃世上の注目を引いた海の郡司大尉、陸の福島中佐も彼女と心合ひの友だつた。彼女は諸種の便宜から、歸途は軍艦宮古に乘る特權を伊東大將から得てゐたので、それに便乘して、水兵に演說をしたりした。

この行は南清に限られてゐたが、五百子はその時から北清視察を思ひ立つてゐた。をりから北清事件が持ち上つた。各國使臣義勇兵は相集つて團匪を防禦したが、分けてその

下田歌子　實踐女學校長
郡司大尉　名は成忠。
福島中佐　名は安正。
伊東大將　名は祐亨。

中心となつて働いたのは日本軍の守備隊だつた。五百子は近衛公に南清視察の情況を述べた末、切に北清軍慰問使差立の必要であることを説いた。公も時世の大勢に鑑みて考慮するところはあつたが、五百子の希望通りに、慰問使として本願寺の連枝を差立てることは、五百子の願だけとしては到底成り立たせがたいので、種々苦心の末、五百子を伴つて小松大宮殿下の許に參殿した。かくて五百子の願意の公の方は運んでいつたが、折も折、内務省から出た宗教に對する布達が、東本願寺の感情を害したため、布教のことにも慰問使のことに

奥村五百子

小松大宮彰仁親王、明治三十六年薨、御年五十七。

も混雑が起つた。これを聞いた五百子は、重要の書面を持つて、烈しい下痢に悩む身を京都に運び、役僧會の席に列し、全部反對論者の中に立つて、己の所信を説いて譲らなかつたため、老法主も納得され、連枝大谷勝信師差遣の儀を許可されたので、五百子はその報告を齎して歸京した。

さて、彼女は何事も自分についての希望は洩さず、一人密かに京城へ向つた。そして、十月九日仁川で慰問使の一行に行き逢つた彼女は、待ち構へてゐたことは色にも見せず、連枝の前へ出ると、「私もお連れ下さい。」といつた。一行の中には、「女が交るといふことはない。」との異議もあつたが、遂に「面白いお婆さんだ、連れていかう。」といつて許されることになり、彼女は豫ねてから望んでゐた慰問使の隨行の一員とな

老法主名は光瑩、大正十二年歿、年七十二。大谷勝信大谷光瑩の弟

ることを得たのだつた。

時の天津領事鄭*氏夫人濱子は、女子として一人天津に止つて盡力し、勳功によつて後に褒賞を賜はつた貞烈な婦人である。その夫人の談として傳へられたのには、夫人は領事館内に籠城して、一箇月以上焦慮盡瘁し、漸く安心の狀態に復したをり晩餐をしてゐると慰問使一行の到着があり、その名刺の中には奥村五百子の名もあつたので、再び團匪に逆襲されたやうな氣がした。それほどまでに怖い恐ろしいお婆さんだとばかり思つてゐたが、その慰問の仕方の優しさを見、その深い同情・親切を知るに及んで、實に滿腔の感謝を捧げずにはゐられなかつたといふことである。

この一行がいつたため、戰死者のためには鄭重盛大な法要が營まれ、濱子夫人も始めて外出して死者の墓へ參ることが出來たのだつた。

*鄭氏　名は永邦。

一四　伊勢志摩の海

田山花袋

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずにはゐられないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されてある處は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩・紀伊の沿岸に如く處はない。優美に傾かず、凄涼に過ぎず、さりとて甚だ平凡に陷らず、港灣相接し、島嶼相連り、斷江・荒磯・漁村・蜑戸、燈台もあれば松原もある。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光

田山花袋、名は錄彌、群馬縣の人、明治四年生、文學者。

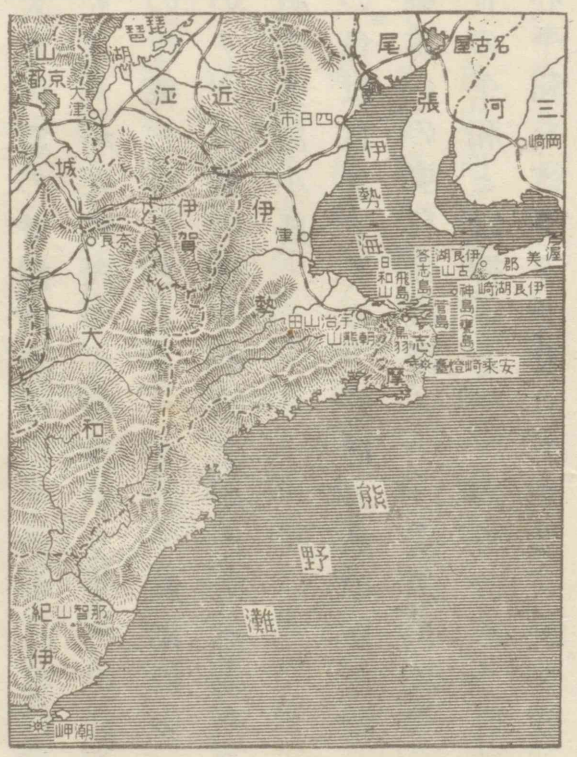
が閃々として千里の海上を照し、斜に欹つた一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に暇がないというてもよい。

伊勢・志摩の海！　いかに變化に富み、明暗に富み、空想に富んでゐることだらう。　自分は嘗て三河國の最南端、渥美郡の一角、伊良湖村の絶端なる古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢・志摩の海を見渡したことがあつた。　夏だつたが、日は一時間ほど前に、遠く向ふに打渡された伊勢朝熊連山の蔭に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々の形や種々の色の面白い夕の雲も、いつ消え行くともなく消え果てて、もう薄昏い夕暮の光が、どこともなく暗碧の波の上に寄せてゐた。

伊良湖村　一端は渥美郡伊良湖崎となり、尾張國の知多半島の師崎と相對して三河灣を擁してゐる。

朝熊　最高峯は海拔千七百五尺。

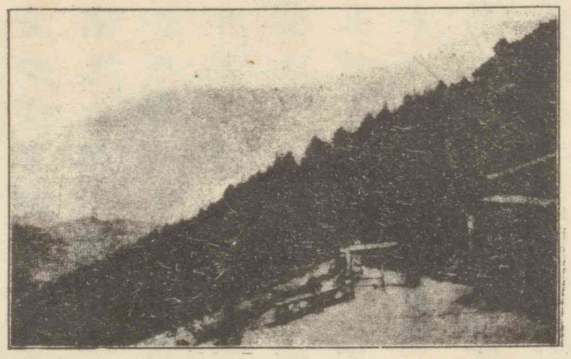
見渡すかぎり、舟といふ舟、帆といふ帆は一つもなく、たゞ海の處々に白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その淋しさといつたらなかつた。　左の方に、海上一里ばかりを隔てて神島が見える。丁度甕を倒さまにしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島はいつて見るとなかなか風情に富んでゐる。　西の山蔭に五六十戸の漁村、そこには



桂光院といふ寺、その寺の一室を借りた村役場。それからその島を廻つて東にいくと、怒濤が天を呑まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀、滿潮毎にその中に呑吐する海水の響は、恰も巨人が天に向つて叫ぶやうで、その壯觀はとても都人士の想像し得るところでない。」神島の少し右方に當つて黑い〳〵大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島・飛島、その他無數の大島・小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈黑く、その上に浮ぶ島の影も微かに、星の瞬、遠海の囁、遠山の姿、自分は深い〳〵空想に耽つた。「平和！　人の世の平和とは抑何ぞや。」自分はかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれ己の弱きを表白してゐるではあるまいか。見よ、この自然を、見よ、この

大觀を。海は四方から來て陸を呑まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡してゐるではないか。島・岩・岸、此等は皆陸の遺はして以て海の怒濤を拒がせるものではあるまいか。けれども、海の力は時の永久の力を借りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陷れて、漸次陸の運命を縮めつゝあるのではあるまいか。



朝熊山

「戰鬪！」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戰鬪といふ感を起さずにはゐられまい。島と陸と波と山とが、いかにも互に刄を交へてゐるやうに配置されて、伊勢の内

海はまるで海水に攻め落されたやう。その海門を守る諸島の影は孤城落日の狀態に陷りつゝ、なほ陸のために節を守つて奮鬪してゐるやうに思はれるのだ。

若し人が、自分の空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に滿ち渡るのも知らずにゐたならば、千鳥の淋しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚から覺めるだらう。その時は、影の低いばらばら松の間を過ぎて、外海に面した荒磯の方へ辿り行くがよい。そして松原を出てしまつたならば、足を留めて神島とその向ふに遠く微かに連り渡つた志摩の山脈との間を見るがよい。月の夜には、その明かな光に紛れて、それと分明に見出すことは出來ないかも知れないが、闇の夜には、

物凄い波の上に、大凡一分間ぐらゐづつ間を隔てて、線香花火のやうにぴかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだらう。なんだと思ふ。燈明崎——志摩國安乘の廻轉燈の光だ。

あゝ、この詩趣ある燈台、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。絶海の畔、漁村を距ること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆面白く斜に捻れてゐる半島の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、殆どその凄じい力に燈台が吹き飛ばされてしまひはしないかと疑はれるばかりだらうと思はれるその燈台に、若い空想がちな青年、でなければ、年老いて世の荒波に漂ひ果てた老爺、それが靜かに穩かに、世の中ではとても見ること

の出來ない悠揚たる態度で、海に惱む船人のために、その夜毎の勤を忘らない寂しい生活。どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては樣々の想像を起さずにはゐられまい。

一五　信仰

釋宗演

ドイツの詩人ゲーテ(Goethe)は、「信仰はあらゆる知識の極度である。」といつた。知識が行き詰つた時、眼前に横たはつてゐる黑金の垣を突破して、眞理の寶藏に進み入ることの出來る智慧と力を與へてくれるものは信仰である。信仰はこれを譬へれば舟や筏のやうなものである。人間の生涯は、「水の流と人の身の……」と謠の文句にあるやうに、たゞこれ生死の流である。この生死の流を渡る舟筏が、即ち信仰である。

釋宗演（俗名一瀨常吉、福井縣の人、臨濟宗圓覺寺派管長、大正八年歿、年六十一。）

ゲーテ（1749—1832）

舟筏がなければ江海を渡ることが出來ないやうに、信仰がなければ人生の海を渡りおほせることは出來ない。

普通に信仰といへば、單に慰安・氣休めになるものぐらゐにしか解されてゐないが、信仰は單に慰安・氣休めになるばかりでなく、人を活動させる大原動力となるものである。信仰は人に勇氣を與へる、活氣を與へる、獅子奮迅の勢を振ひ起させるものである。信仰を得た人は、恰も飢ゑた人が食を得たやうなものである。眞理の大寶藏に向つて向上の一路を驀進しようとする青年男女に若し信仰がなかつたならば、

釋宗演

所詮途中の障害物を突破することは出來ない。佛敎では、信仰を称して一に大覺といひ、大覺を得た人を覺者とも佛者とも称する。大覺とは、平易にいへば、「さとり」である。自覺・覺他、覺行圓滿の境地に至つたのが覺者即ち佛陀で、佛陀になつたほどの人は、その信仰によつて眞理を徹見する力を有してゐるから、決して知識の行き詰ることはないものである。向上の一路を驀進しようとする青年男女に信仰の必要な所以はこゝにある。かのゲーテの言のやうに、信仰はいかにも知識の極度に相違はないが、それと同時に、また知識の端緒でもある。絶對や空想を排斥して、實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、その基礎となるものは信仰である　信仰がなければ辨異・統同を行ふことは出

來ない、歸納も演繹も批判も出來ない。富貴も淫することが出來ず、貧賤も移すことの出來ない道德的大勇猛心も、また信仰によらねばこれを得ることは出來ないものである。

一六　眞人間

吉田絃二郎

何も持つてゐないといふことは、人間として、可なり寂しい生活であるに違ない。しかし、何も持つてゐない生活を心から有難く尊く思ふ人でなければ、本當の人生の味を嚙みしめることは出來ないだらう。

哲人ソクラテス*は、知識の究竟は「自分は何も知らぬ愚者」といふことを意識することだといつた。智者に取つては、自分の無智なことを心から覺るのが、唯一の救の道でなけれ

吉田絃二郎　名は源次郎、佐賀縣の人、明治十九年生、早稻田大學講師

ソクラテス　Socrates　ギリシャの哲學者。（�full 469—紀399）

ばならぬ。　金を持つものに取つては、金を捨てることが唯一の救の道でなければならぬ。　官位を持つものに取つては、官位を捨てることが彼自身を救ふ最後の方法でなければならぬ。「*ソロモン(Solomon)の榮華も野の百合に及ばざりき。」といつたキリスト(Christ)の言葉は、決して譬喩的の美辞ではない。　野の百合は百合であるが故に、ソロモン王の榮華にも勝る幸福を持つことが出來たのだつた。　ソロモンの生活は、王といふ權威に囚はれたために、本當の人間の幸福を持つことが出來なかつた。　ソロモンが若し眞人間の生活を持つことが出來たならば、彼もまた野の百合と同じ生活の幸福を味ふことが出來たはずである。

私達は何物をも持たぬ眞人間であることを祈らねばならぬ、自然のまゝの人間であることを求めねばならぬ、嬰兒であることを冀はねばならぬ。

私達は富を持たぬために、毎日どれほどの苦痛や屈辱やを忍ばねばならぬか知れぬ。　私達は貧しいために、富んでゐる人達の夢にも知らぬ種々の涙を經驗せねばならぬ。　私達は貧しいといふことを呪つたことも屢々だつた。　しかし、私達は貧しいために、自分の魂を傷つけてはならぬ、自分の素直な魂をいびつに曲げてはならぬ。

私達は貧しければこそ、人間の世の美しい同情や愛や涙を、いやといふほど味つた。　また苦痛といふことをも味つた。涙があり苦痛があつてこそ、私達の魂は錬られ、磨かれ、豊かにされ、伸び展げられていく。

*ソロモン　イスラエル國の有名な王。(紀993—紀965)

*ソロモンの榮華　云々　バイブルにある語。

しかし、涙や苦痛は私達の魂を大きくし深くし人間らしくする機縁であるが、同時に、私達の魂をいびつにしたり頑(かたくな)にしたりする力をも持つてゐることを忘れてはならぬ。

悲みや苦痛は神の鞭である。素直な心の人に取つては、神の鞭は自分を一層正しく善くするものである。けれども、邪な心の人に取つては、神の鞭は彼自身を益、正しいことや善いことから遠ざけさせる。私達は自分の心を素直に保つて、日々の苦痛や涙を感謝しながら受け容れねばならぬ。

私達が正しい人間となつて、正しい人間の生活をすることの出來る機縁は、いつでも、そしてどこにでも存在してゐるのである。

貧しいといふことも、私達をして人間らしい生き方を味はせる一つの尊い機縁である。裏切られたといふ苦しさも偽られたといふ悲みも、人一倍不運だといふ意識も、私達に取つて有難い機縁であらねばならぬ。更に自分たゞ一人が世界に孤獨であることを見出す寂寞も、自分に取つては尊い機縁であらねばならぬ。

「富めるものの天國に入るは、駱駝の針の孔を潜るよりも難し。」といつたキリストの言葉は眞實である。更に「悲みあるものは幸なり、その人は慰めを得べければなり。」といつた彼の言葉は、實際涙なしには受け容れられないほどの尊い眞人間の言葉だ。

私達は貧しいこと、愚かなこと、悲みを持つてゐることを感謝せねばならぬ、そこから天國の門が開かれるからだ。

富める云々　バイブルにある語。
悲み云々　同前。

「何のその百万石も笹の露。」かう歌つた俳人一茶の意氣は、眞に平民の幸福と矜恃とを味つたものでなければ掬ぶことが出來ぬ。俳人一茶に取つては、加賀百万石の權勢より*も、彼自身の魂の自由が尊かつたのだつた。

私達は自分の魂の無限に尊いことを本當に自覺せねばならぬ。官位に魂を賣るものがあり、黄金に魂を賣るものがあり、虚榮に魂を賣るものがある。家を捨て、富を捨て、官位を捨て學問を捨て、衣を捨てて、素裸の人間となつた時、始めて眞人間の魂が現れる、眞人間の魂が見出される。

一着の美衣を裝ふことは、やがて自分の魂の上に一箇の重石を積むこととなる。更に土地を所有する時、家を所有する時、官位を得、黄金を積む時、私達は自分の魂の上に重荷を

一茶　小林氏、信濃國の人、德川末期の俳人、文政十年（一八二七）歿、年六十五。

加賀百万石　加賀國金澤藩主前田氏所領百二万石。

積み重ねてゐることに氣づかねばならぬ、自分の魂を賣つてゐることを悲しまねばならぬ。

空の鳥は土地を持たず、家を持たず、官位を持たぬから、ソロモン王にも優つた生活の幸福と自由と光榮とを持つてゐる。私達はもつと〳〵貧人の幸福を心から意識せねばならぬ。

一七　睡蓮

五十嵐力

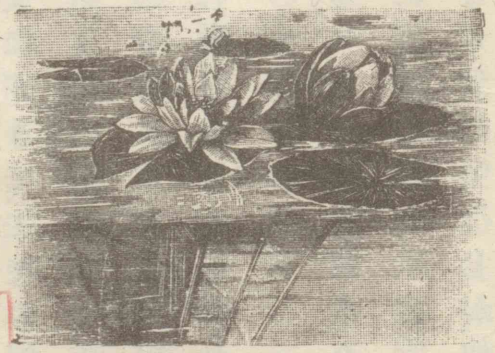
この春、或友達より睡蓮の珍種を貰ひ受けて、徑一尺五寸ばかりなる素燒の鉢に植ゑおき候處、日を追うて發育し、昨今は日毎に一輪乃至三四輪の優しき花を見せ居り候。烈日かん〳〵と照り渡りて、なべての草木の打萎れ居り

五十嵐力　米澤市の人、明治七年生、文章家、早稲田大學教授。

候折に、この花の獨り凉しき笑の眉を開きたるを見候は、そのすが〳〵しさ何にか譬へ候はん。

睡蓮を育つる興味は、最初の一葉の水に浮ぶ時に始り候。たゞ見る、一塊の泥土、誰かこの裏に目を新にする百千の花葉を藏することに想ひ及び候べき。春暖の加はるとともに、この泥土に生の蠢きの見え初めて、やがてその間より蝸牛の角の如き數條の芽生じ候。その芽長ずるに隨ひて、尖頭の部分やゝ太くなり、漸くにしてつぼめる葉の形を水面に現ずるや、忽ちばらりと開けて、べたりと水上に浮び、盃の如く、海月の如く、朧夜の月影とも見るべく、小さき蛙の圓座とも称すべく候。かくて、今日一葉、明日二葉、五葉、八葉、圓盤の數日毎に加はりて、海中の連珠島の

如く見ゆるが中に、やがて一本の花莖長く水面を抽いて、その尖頭に彫刻の如き小蓮花を開き候。その美しく品位ありて而もたよりなげに情あるらしき樣は、あたりに友もやあると顧みるが如く、水面を高く離れたるを危むが如く、眩しき日に照し出されて、己が美容を羞づるが如く、而して水土の光澤ある圓き葉は、空中の美花に對して、競ひて鏡面を捧ぐるに似て、鉢の中の小天地の景致麗しとも面白しとも申すも愚かに候。



睡蓮

一たび花を着けたる後は、晴天なる限り、連日二三輪を見

せざることなくして、十月の半ばに至り候。一年の三分の一を領して、しかも常に鮮かなる姿を現すこと、百日紅その他の命長き花の末葉の恥多き類にあらず候。一花の壽命は二日を常とし、朝八九時の交に開きて、午後の四時前後に閉ぢ候。閉ぢたる姿は小さき鰻の頭の如く、再び翌日の朝陽を迎へて開き、二日目の夕方に至り長へに閉ぢて、やがて力なき頭を水中に没し候。終をよくする、またこの花の一德と申すべきか。

こゝにこの花に附屬して御耳に入るべき一話これあり候。小生、初め睡蓮を植うる時、一緒に三つの鉢を求めて、草を植ゑ、石を置き、或は金魚を放ちなど致し候ひしが、他の二つの鉢は、五日・七日を經れば薄濁りして、水面にどろどろの綿を浮べ候に、睡蓮の鉢のみは、日を經、月を越ゆれども、清明澄徹にして、少しも濁ることなく候。小生始め家人等皆々不思議のことに思ひ候ひしが、よく〳〵取調べ候處これは、贈主の花友達が嘗てアメリカ(America)より取寄せたる澄水草の根が、睡蓮の根に附着し來れるがためにて候ひき。この草、細莖・狹葉、外觀の甚だ振はざる小草には候へども、一種特別なる化學的分解の作用ありて、その濁水を澄す力は世界第一と称せられ候。もとアメリカのどこやらの陰濕なる地方に在りしものなるが、ふと植物學者の目に止りて、廣く世界に恩澤を及ぼすに至りし由。我が臺灣に嘗て濁水の滯れる濕地ありて、マラリヤ(Malaria)の流行地として名高かりしが、この水草を植うるに及び、全く

この病の迹を絶ちたりと申し候。造化は人の惡き施主の如く、一方に病苦を課すれば、必ず一方にこれに應ずる藥を備へて、暫くこれを隱しおき、人智を試みて後にこれを與へ候。世に不用なるものなく、物には必ず二重・三重・五重・百重の意義これあり候。歌に、「浦の濱木綿の重なる如し。」と申し候へども、理趣の重疊層累せること、豈に濱木綿に限り候はんや。不一。

一八　風鈴

大谷繞石

嘗て或人の贈つてよこした半鐘形の支那渡來の鈴のあることを思ひ出して、これを風鈴に造つて、座敷の廂に吊した。いゝ音を出す。

浦の濱木綿　三熊野の浦の濱木綿もかへなす心は思へどたゞに逢はぬかも。（柿本人麿、萬葉集）

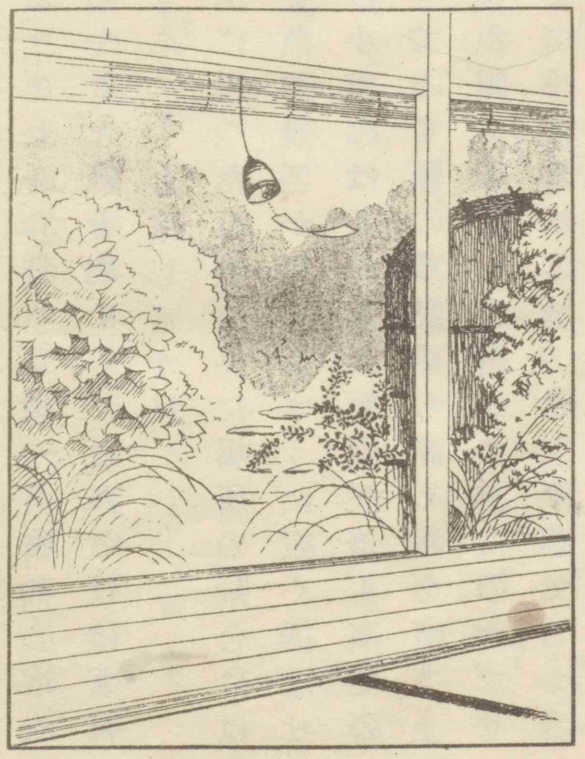
大谷繞石　名は正信、松江市の人、明治八年生、第四語學者、第四高等學校教授。

庭はこなひだ草拔りしたばかりだから、清々してゐる。まんべんなく打水する。それから行水を遣つて、廣袖の浴衣を着て、縁に出て、ぼんやりと庭を眺める。暮れるにはまだ早い。風鈴がちりゝん〳〵と涼しさうだ。

店の内はいつも打水に濕つた石敷、中央に場所の割合には大きな泉水、池には金魚が幾匹か尾を重さうに緩く振はせて泳いでゐる。岩の小島にはその島の幅の三倍も高さのある鐵製の鶴が立つてゐて、頭の頂點から高く水を噴き上げてゐる。白大理石の圓テーブルに對つて、雪白のエプロン掛けた少女の持つて來た氷水の堆い氷を、銀匙でさくさくとコップへ突き入れる。波に千鳥の模樣を青い硝子玉で、その他は無色の硝子玉で造つた廂の淺い簾の外の吊忽

から下つてゐる風鈴がちりゝんゝ。

町中とはいへ、寺のことだから書院も天井が高い。土塀近くには躑躅・萩など植わつてゐるが、その廣い砂庭には、秋には或は眞つ黄に或は眞つ赤になる葉雞頭がすい〳〵と立つてゐるだけ、本堂の陰になつて日の光は當つてをらぬ。その書院に、大方は飛白の單衣の若い男が七八人、勝



手な處へ草座蒲團を持つていつて、それに胡床をかいて、ぢつと庭に見入つてゐるもの、立膝を両手で抱へて眼を塞いでゐるもの、腹這になつて頬りに手帳に何か書きつけてゐるもの、その姿態は人さま〳〵だが、誰一人口を利かぬ。學生の俳句會でもあらうか。時折のそよ風に、塀際の躑躅・萩の葉が搖れ葉雞頭の莖が動くと、同時に軒に吊した風鈴がちりゝん〳〵。

いゝ月だと、更けた月を雨戸一枚繰つて眺める。空は水のやうだ。月は折から庭の青桐の木末に懸つてゐる。或一枚の廣葉の虫の喰つた穴が大小二つ判然と見える。近處は寢靜まつてゐる。この長旱に涸れもせぬ門川の淙々たる瀨音も、こゝ裏庭にゐては音が弱い。時折蜩に似た河鹿

の朗かな聲が川の上手に聞える。無いやうだが葉を搖ぶるほどの風はあると見える。廂の風鈴も微かにちりゝんちりゝんと鳴る。

一九　比叡山

近松秋江

千有餘年國家鎭護の道場だつた比叡山延*曆寺は、どう贔負目に見ようとしても、徒に形骸だけ殘つて、精神の衰へてゐることは爭はれない。けれども、人間の精神的仕事の中では、比較的最も永久に存續すべきはずのその宗敎よりも、なほ永久に新しく若々しいのは自然だ。靈場としての叡*山は甚しく振はないが、自然の叡山は、高祖傳敎大師以來千有餘年の久しき、依然として今もまだ新しく若い。

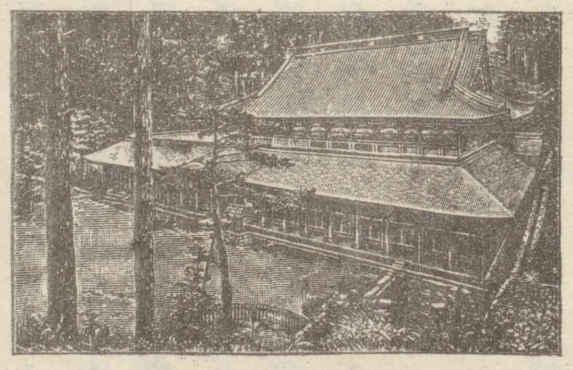
近松秋江　本名德田浩司、岡山縣の人、明治九年生、文學者。

延曆寺　天台宗總本山、僧最澄の開基。

叡山　比叡山、滋賀縣にあつて、京都府に跨る、海拔二八六〇尺。

傳敎大師　俗姓三津、名は最澄、平安朝初朝の高僧、弘仁十三年（八二二）歿、年五十六。

私は叡山の自然を好む。關東地方ではこれぐらゐの山は決して珍しくないが、京都といふ大都會に近い場所にこれぐらゐの高山のあるのが珍重するに足るのだ。私が或年の夏三箇月をそこに過して最も快く思つたのは、根本中堂のある處から、傳敎大師の御廟の脇を通つて、釋迦堂の傍を過ぎ、黑谷の青龍寺まで約二十餘町の間、下界は燒きつけるやうな炎天であるのにも拘らず、鬱蒼とした杉木立に空を掩はれてゐるので日傘を翳さないで歩くことが出來たことだ。



比叡山根本中堂

黑谷　俗に本黑谷、京都府愛宕郡八瀨村の東。

四明嶽から京の街を俯瞰するのも愉快だ。平將門が王城を俯瞰して非望を起したといふ將門岩のある邊から、今の京の街を眺めると一目に見える。私はその夏叡山にゐる間に、幾度も四明嶽に登つた。根本中堂のある處から山頂までは僅かに十七町で、適度の散歩區域だ。幾群の万燈のやうな無數の電燈に埋れてゐる京の街が歴々と指される。中でも、四條の大橋を中心として、三條の大橋に至る賀茂川べりの涼床のある邊が燈火の數が最も多くてさながら一團の火花を散したかのやうだ。

四明の頂上は涼しい。夜などセルに浴衣ぐらゐを重ねてゐないと寒い。京の街を眺めてゐた眼を、今度は東に轉ずると、逢坂山の麓に撒布した大津の市街が見える。大津の

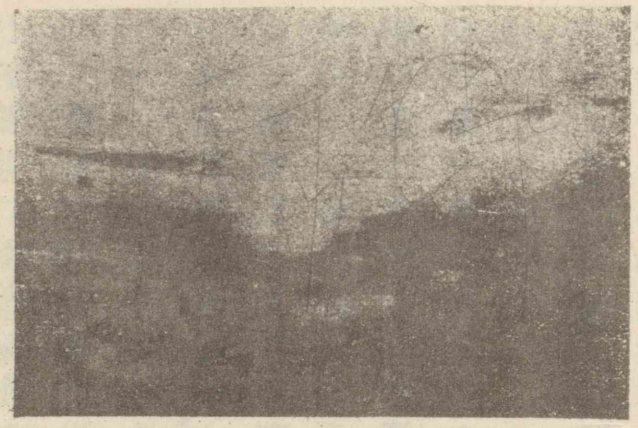
四明嶽　また大岳ともいふ、比叡山の絶頂の稱。

平將門　相馬小次郎と稱した、天慶三年（一〇〇）歿。

賀茂川　京都市の東部を貫流する川。

セル　Serge の略、一種の羅紗。

逢坂山　大津市の南、京都府の境。



四明嶽から見た琵琶湖の曉

火影は流石に京都に比べて寂しい。湖水は山頂からはやや隔たり過ぎてゐて、水の美を眺めるには物足りないが、東近江の乱山から滿月のさし昇つて來る時の夜景は美しい。

四明嶽からは隨分遠方をも眺望することが出來る。その夏八月の二日だつた。そこから木曾の御嶽の雪峰を遙かに望んだ時には愉快だつた。御嶽は伊吹山からやゝ南に寄つたところ、即ち關が原の低地の眞上のあたりに、その日の中でも最も大氣の

木曾　長野縣、木曾川沿岸地方一帶の汎稱。

御嶽　同縣。

伊吹山　琵琶湖の北方、岐阜縣の境、海拔四五六〇尺。

關が原　岐阜縣。

鞍馬山　京都府。

拭はれた朝の八時・九時頃、僅かの間だけ見ることが出來た。鞍馬・愛宕は指呼の間に脉々として連立してゐる。やゝ離れて、攝津の六甲、晴れた日には大阪の煤煙も見えるし、茅渟の浦の波光も望まれる。それから生駒・葛城・金剛の諸山、南山城の鷲峰山、大和の大臺が原は遠く東南方にあたつて、沖天に連亘してゐる。南の方一帯に開けた平野の果には、淀・木津の二大長江が白く輝きながら、蜒蜿として流れてゐる。夜そこに立つと、それ等の流に沿うた伏見・宇治・淀などの燈火が遠く望まれるのも懷かしい。

二〇　應仁の暗雲

朱儒入道を討つて功のあつた山名持豊入道宗全は、顏色が

愛宕山　京都府。
六甲山　兵庫縣。
茅渟の浦　大阪灣。
生駒山　奈良縣。
葛城山　同縣。
金剛山　大阪府、葛城山の一峯。
大臺が原山　大和伊勢紀伊三國に跨る。
淀川　宇治川・桂川の合流。
木津川　淀川の支流。
宇治・淀　京都府。
朱儒入道　赤松滿祐、身長四尺に足りなかつたから世人これを朱儒入道といつた。
山名持豊　足利氏の臣、文明五年(一四七三)歿、年七十。

朱のやうに赭かつたので、世に赭入道と呼ばれた。四職では赭入道、三管領では細川勝元、この二人が最も勢を振うた。時の將軍足利義政は大英雄か大痴漢か乱れ行く世を餘所にして、茶よ能よとの風流三昧、万民の膏血を絞つて夜宴の燭に注いだ果は、所謂德政の暴政に自ら法を乱すのだつた。さらでもの世の乱は彌が上にも乱れ〳〵ていくばかりで、遠い地方はいふに及ばず、都大路の眞晝間に、盗賊・野武士の憚もない高哂、流離の民は一揆を起して、哀訴の鐘を打鳴すのだつた。世も既に終に近づいた氣配と見えた。

この間に、犬の細川、猿の山名、互に牙を磨いて相爭ひ、延いては將軍家の家督爭、搗てて加へて畠山・斯波両家の家督爭、かくて十有一年に亘る未曾有の大乱——應仁の乱ははぐくま

四職　室町時代に侍所の所司を勤める職、山名・京極・一色・赤松の四氏。
三管領　將軍を輔佐し內外の機務を總べる職、斯波・細川・畠山の三氏。
細川勝元　足利氏の臣、文明五年(一四七三)歿、年四十四。
足利義政　室町第五代將軍、延德二年(一四九〇)歿、年五十六。
將軍家の云云　義政の弟義視と子義尙と。
畠山　畠山政長と同義就と。
斯波　斯波義廉と同義敏と。
十有一年　應仁元年(一四六七)から文明九年(一四七七)まで。

れたのだ。

畠山政長と同じく義就との御靈林の決戰によつて、この乱の幕は開かれた。二人は互に家督を爭うて、彼は細川勝元を、此は山名宗全を後楯に賴んだ。將軍義政は「両軍相鬪うて雌雄を決せよ。諸將のこれを援くるを許さず。」と命じたけれども、宗全は密かに義就を援けて勝たせた。あはれ、勝元の馬鹿正直！

細川殿は洲の股川殿と呼ぶぞよき
尾張を苦しむるはこの川ぞ

と京童は取沙汰した。政長は尾張守だつたのだ。勝元は切齒して憤り、「さらば。」とて兵を集めた。諸國の兵集るものは實に十六万人、室町御所を乘取つて、その四足門に旗を樹て

畠山政長　持富の兄、持國の養子、細川勝元に黨した。

義就　畠山持國の實子、山名宗全に黨した。

御靈林　京都上京。

洲股川　今の長良川、當時濃尾の境界だつたから尾張の洲股川といつた。

室町御所　花の室町殿、足利義滿の室町に起した新館。居に擬した。

た。これに對する宗全の兵は、その勢十有一万と註された。「今日は某殿の御着陣ぞ。」「明日は某國の勢が上り來るぞよ。」「某殿はいづれの手ぞ。」「某國は東の手か西の手か。」築地の蔭、辻の角、かうした噂がおど〳〵と恐怖に襲はれた老幼の耳から耳へと囁かれた。打物の影、旗の影、日毎に入り來る諸國の人馬は、都の内外に充ち滿ちた。一條・二條の大路・小路には、東訛・筑紫訛、蠻音荒らかな田舍武士が横行して、掠奪を恣にしては、殺虐の血にその鬚面を頰笑ませた。洛中今は上を下へとどよめいて、民は皆家を捨て、營みを棄

足利義政

て、調度を負ひ、弱きを扶けて、右往左往にさまよひ惑ふほどに、戰は早くも戻橋の畔に開かれ、矢叫の聲、鬨の聲、花の都は忽ちにして血煙渦卷く修羅の巷となつた。そして日毎日毎に家々は燒き拂はれていつた。

両軍は相國寺を中心として毎日々々戰うた。戰の目的がどこにあるかをも忘れて、たゞ戰のために戰うた。相國寺の杉樹立に降る蟬時雨が血のやうな晩霞に喧しからうが、五條の橋の擬寶珠の上に月が澄まうが、比叡の頂に雪が降らうが、鴨川沿の柳が芽ぐんで春風に靡かうが、烏丸殿の燒跡に欝金櫻が咲き乱れようが、高倉御所の殘礎に草が萠えようが、六條磧の礫に秋風が白く立たうが、燕が來ようが、雁が歸らうが、委細お構ひなしで、毎日々々鬨の聲と攻鼓の音

戻橋　一條通堀川に架した橋。

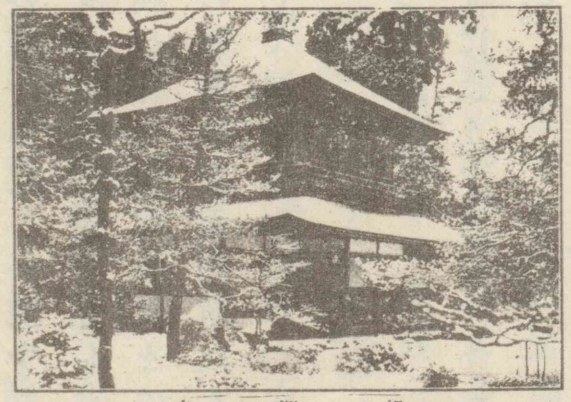
相國寺　足利義滿創建、京都五山の一、臨濟宗相國寺派大本山。

烏丸殿　一條烏丸御所、花御所、室町殿、義政の居館、烏丸今出川の北。

高倉御所　中御門堀川東。

で明し暮した。初のほどは畠山政長・大内政弘などの間に可なり手痛い戰もあつたが、後には たゞ中譯だけの欠伸交りの矢叫に、戲のやうな小競合が十一年間も續けられた。

兵燹日夜都の空を染めて、高倉御所・烏丸殿を始として、仁和寺の四十九院、嵯峨野の四十八院以下の神社・佛閣も皆灰燼に歸してしまつた。見渡す限りの燒野原、雨暗く降りしきる夜など、燐火が青くさまようて、死骸を漁る痩犬の聲が物凄く聞えた。



銀閣寺

大内政弘　相伴衆、義興の父、この時山名宗全に助けた。

仁和寺　京都府葛野郡花園村一帶をいふ。

嵯峨野　京都府葛野郡、太秦附近以西嵐山に至る汎稱。

あゝ、變り果てたこの樣よ！　猿樂の宵は皷に更けて、門の牛車の轅に眠る小舍人の頰に櫻をふゞく朧月のその春の俤はどこへ消えたか。紅紫の被衣の隙から美しい眉を匂はせながら、女童など引具して行き交ふ上臈の姿も見られねば、朱雀*御門の朝風に轡を並べて興じ行く衛府の人々の華奢な姿も見られない　御所の侍の飯尾六左衛門尉は、その老顏に昔の俤を浮べつゝ、黯然として涙を呑むのだつた。

なれや知る都は野邊の夕雲雀
あがるを見てもおつる涙を

實に恨は萠え出る草の緑とともに徒に長う、夕雲雀のあがるのを見ても、落ちる涙は禁め得ない。

大英雄か大痴漢か、相國寺の激戰の際には、餘燄が花*の御所の檐端に渦卷いたが、義政はなほうたげの杯を置かなかつた。この大乱を眼の前に見ながら、そして自分がその當面の責任者でありながら、知らぬ顏して歡樂の夢に耽つてゐた。琅玕の柱、翡翠の帳、金銀・珠玉を鏤めた銀閣寺*の美觀と、所謂東山時代*の藝術とは、この勇敢な享樂家（ディレッタンテ Dilettante）の手によつて、炎と血との間から得られた記念なのだ。（歴史小品血煙）

朱雀御門　大内裏十二門の一、南面の正門、二條大路三門の中央

花の御所　室町御所、

銀閣寺　本稱慈照寺、臨濟宗、京都洛東の北偏淨土寺町にある。

東山時代　足利義政の時代、國運は衰微したが、美術工藝が發達し、名人巨匠が多く、蒔繪が最も名がある。

二一　阿新丸　その一

さるほどに、君*の御企圖を申し勸めけるは、源中納言具行・右少辨俊基*・日野中納言資朝*なり。各〻死罪に行はるべしと評定一途に定まりて、まづ去年*より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に

君　後醍醐天皇。

俊基　藤原氏、元弘二年（一九二）殁。

資朝　藤原氏、元弘二年殁。

去年　正中元年。

下知せらる。

このこと京都へ聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、「今は何事にか命を惜しむべき。父とともに斬られて、冥途の旅の伴をもし、また最後の御有様をも見奉るべし。」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは人も通はぬ怖ろしき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、いかにしてか下るべき。その上、汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。」と泣き悲しみて止めければ、「よしや伴ひ行く人なくば、いかなる淵瀬にも身を投げて死なん。」と申しける間、母、いたく止めなば、また目の前に憂き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく、今までたゞ一人附き副ひたる中間を相副へて、遙々と佐渡國へぞ下されける。

日野資朝（菊池容齋畫）

路遠けれど乘るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分くる越路の旅、思ひやるこそあはれなれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乘りて、ほどなく佐渡國にぞ着きにける。人してからうといふべき便りもな

ければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立ち出でて、「この内への御用にて御立ち候か。　またいかなる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承りて、その最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。」といひもあへず、涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、蹈皮・行纏解かせ、足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、「同じくは父の卿を疾く見奉らばや。」といひけれども、今日・明日斬らるべき人にこ

れを見せては、なか〳〵よみぢの障ともなりぬべし。　また関東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔たりたるところに置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行末も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりもなほ悲し。　子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。　これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに堀掘り廻らし、塀塗りて、行き通ふ人も稀なり。　情なの本間が心や、父は禁牢せられ、子は未だ幼し、たとひ一所に置きたりとて、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寢に見

ん夢ならでは相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の逆こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙かに御湯も召され候はぬに御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼うたてしきことかな。我が最後の樣を見んために遙々と尋ね下りたる幼きものを一目も見ずして果てぬることよ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間のことに於ては頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ顯密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿舁きする氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辞世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形　四大今歸空
將首當白刃　截斷一陣風

年号・月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。このほど常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と泣き悲しむも理なり。

二二　阿新丸 その二

阿新丸は幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をばたゞ一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我より先に高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞ることあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる欝憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經けるほどに、阿新畫は病のよしにてひねもすに臥し、夜は忍びやかに拔け出でて、本間が寢處なんど細々に窺ひて、隙あらばかの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものをと思ひ定めてぞ狙ひける。

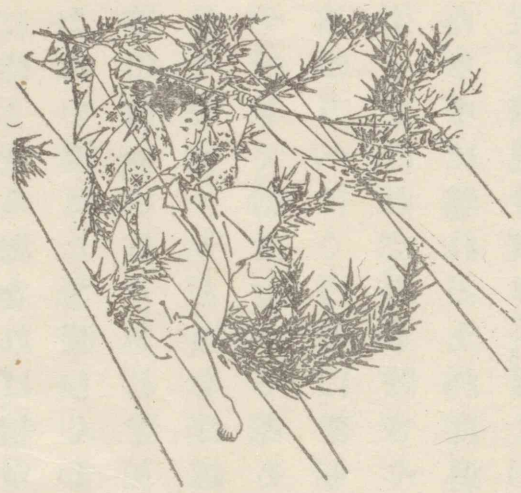
或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥し

たりければ、今こそ待つところの幸ひよと思ひて、本間が寢處の方を忍びて窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、拔き入りてこれを見るに、それさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立寄らばやがて驚き合ふこともやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、

燈の影を見て、蛾といふ虫の數多明障子に取付きたるを、ずはや究竟のことこそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この虫數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寝入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を拔きて胸元に當て、寝たるものを殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突き通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心靜かに後の竹原の中にぞ隱れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆も驚き騷ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さ

き足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。搜し出でて打殺せ。」とて、手に手に松明を點し、木の下、草の蔭まで、殘るところなくぞ搜しける。



阿新丸（菊池容齋筆）

阿新は竹原の中に隱れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣孝

子の義にてもあらんずれ。若しやと、一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越えんとしけるが、口二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。されば これを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やす〳〵と堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乘りてこそ陸へは着かめと思ひて、辿る〳〵浦の方へ行くほどに、夜もはや次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隱さんとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隱れゐたれば、追手どもとおぼしきものども、百四五十騎馳せ散りて、「若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と、道に行き逢ふ人毎に問ふ音してぞ過ぎ行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行くほどに、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒の有樣を見て痛ましくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事の樣をありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞きて、我この人を助けずば、只今のほどにかはゆき目を見るべしと思ひければ、「御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて、越後・越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ背に負ひて、程なく湊にぞ着きける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内には船一艘

もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乘り浮べたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て篷を捲く。山伏手を擧げて、「その船それへ寄せてたび給へ、便船申さん。」と呼はりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕ぎ出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結びて肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか珠數を押揉みて、『一持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵。』といへり、況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現・金剛童子・天龍夜叉・八大龍王、その船此方へ漕ぎ返してたばせ給へ。」と、跳り上り〳〵肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹き來りて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてて、「山伏の御坊、まづ我等を御助け候へ。」と、手を合せ膝を屈め、手に〳〵船を漕ぎ戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩に乘せ、山伏の手を引き、屋形の内に入りたれば、風は元の如くに直りて、船は湊を出でにける。その後、追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬を控へて、「あの船とまれ。」と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の府にぞ着きにける。阿新山伏に助けられて鰐口の死を遁れしも、明王加護の御誓いちじるかりけるしるしなり。（太平記）

二三　沈默の凱旋式

吉江孤雁

晴れ渡つた七月の空から落ちる日の光は、今日祝勝の各國

吉江孤雁　名は喬松、長野縣の人、明治十三年生、早稻田大學教授。七月　四層千九百十九年。（大正八年）

軍隊の通過する路を照してゐる。コンコルドの廣場から凱旋門の方を見やると、烟るやうなマロニエ(Marronier)の若葉の間に、裝飾した小旗の無數と繰幕とが靜かに搖いでゐる。

マロニエ

遠くに祝砲が鳴り響いて、行列の進行の始つたことを告げる。フォッシュ(Foch)元帥が、ジョッフル(Joffre)元帥が、ペタン(Petain)元帥が、歩みを始めたことだらう。軍樂の音が聞え出した。ABCの順序に並んだ各國の軍隊が、アメリカ軍を先頭にして、進行を始めたことだらう。

この同じ道路を、嘗てはナポレオン(Napoleon)*の軍隊が同じ凱旋の式を以て歩いたことだらう。或はその反對に、プロシャ(Prussia)の軍

*ナポレオン　佛國皇帝。（769—1821）

隊が呪はしい祝勝の樂を奏して歩いたことだらう。けれども、今日のやうに、各國の軍隊が、しかも遠い極東の日本・支那の軍隊まで加へて、戰勝の式場へ進んだことは、今まで一度もなかつたことだ。

フォッシュ元帥

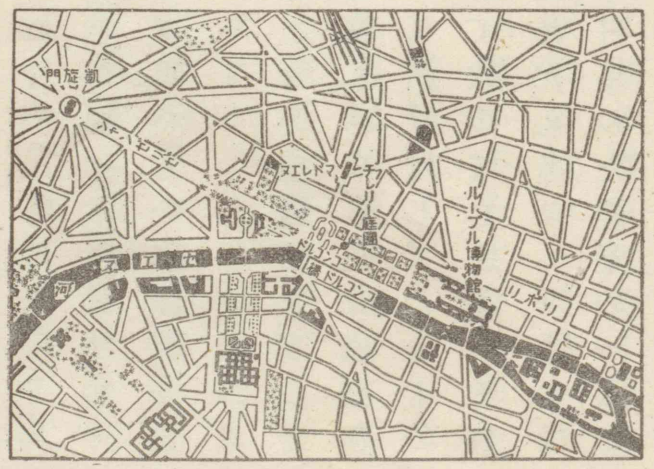
賀すべきではある。しかし、なんきではある。しかし、なんといふ靜かさだらう。式場の周圍へ急ぐ人々の足が繁くないことはない、コンコルドの廣場からセエヌ(Seine)の河まで、シャンゼリゼ(Champs Elysees)の両側は勿論、リボリ(Rivoli)の大通も人で埋つてはゐる。そして、その黑く蟻のやうに集つてゐる

人々の上を、つい去年の秋まで、この首都の夜を空高く警戒してゐた飛行機の幾つかが、今日低い空を縱横に飛翔して、燕のやうに翼を返して横轉し逆轉してはゐる、斷えず煙火が空に打揚げられて、景氣よく四方へ散つてはゐる。しかし、なんといふ重くるしい沈默が衆人の上を壓してゐることだらう。

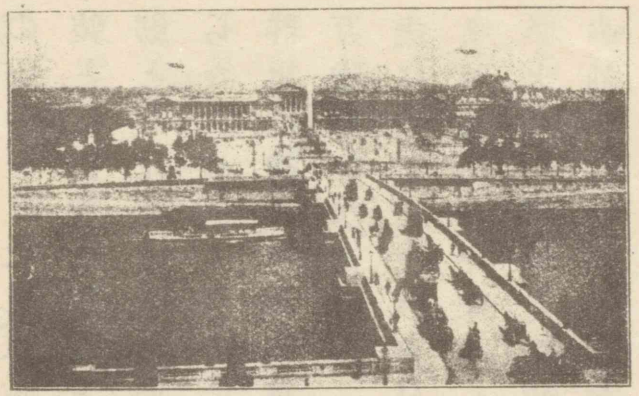
私は最初マドレーヌ(Madeleine)の方からコンコルドの廣場の方へ出て見た。そして大噴水の近くの台の上に登つて、比較的安全な場所を見出しはしたが、なんとなく物足りなくなつたので、地下電車でセエヌ河の底を右岸に出て、橋の上からルーブル(Louvre)の側を歩いていつた。そして廣場の人込の中に入つて、式場の見える處まで近づきはしたが、そこに佇んで、次

第に近寄つて來る樂隊の響と、戰勝軍の步調と、群集の歡呼の聲とを耳にし、軍隊の派手な服裝と、風に飜る軍旗と、日に輝く銃劍とを見てはゐたが、殆ど胸も躍らなかつた。

群集は時々各國の軍隊に對して萬歲を呼びかける。「フランス万歲」に始つて、それが日本の軍隊にまでも及んで來た。「日本万歲」といふ叫を聞いた時には、少しは心が動いた、懷かしさが胸に湧いた。特によく訓練された日本士官の一隊は盡く馬上だつただ



けに、一層他國の軍隊よりも立派に見えた。これは私一人の贔負目ではない。その日の夕刊の各新聞は、悉く「痩せた、意氣なしやんとした日本軍人。」といふ讃辞を呈してゐた。



コンコルドと廣場及びコンコルド橋

しかし、なんとない空虛さよ、どことない白けた寂しさよ。人々は強ひて聲を絞つて歡呼はしてゐるものの、すぐ疲れて默つてしまふ。それはなんのためだらう。

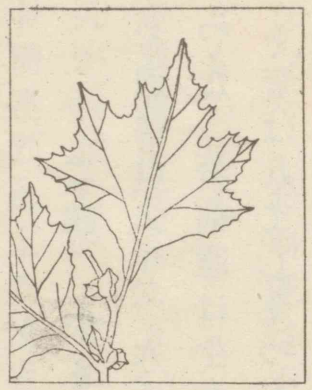
恐らくは、今日集つた群集の一人として喪服を身に着けてゐないもののない悲みが、その一つの原因だらう。全フランスは喪裝してゐるといはれてゐる。今日の凱旋式は、いはば全國民の晴の葬式のやうなものだ。勝利者の歩む道の両側には、無數の歎が一時聲を潜めてはゐるが、隙さへあれば、その歎が黑い手を生存者の上に伸すのだらう。

それぱかりではない。こんな空前な儀式が、歴史上曾て見られなかつた大げさな儀式が、なんとなく我等の要求してゐるものとは最早そぐはないやうな氣がする。無用な、また愚かな事柄のやうで、皆集つて、一種眞面目な道化芝居を演じてゐるやうな氣もする。無益な感激と衝動との後で、止むを得ずその後の祭を飾つてゐるやうに思はれる。

その愚かさに人々は密かに氣づいてゐるだらう。たゞ夢

中になつて騷ぎ廻つてゐるのは、アメリカの若い兵士だけだ。彼等は戰爭の景氣だけを味ひに人の國へ來たやうなものだ。そして戰爭の愚かさに氣づかずに、それを今から悟り出さうとしてゐるのかも知れない。今後の世の中に、全く戰爭がなからうとは思はれない、戰爭をしないでゐられない場合もあらう。けれども、爲すべからざることを爲してゐるのだから、これぐらゐ愚かなことはない。人間はその愚かさを度々繰返さねばならないのかも知れないが、少くとも多數の人々は今日その爲すべからざることであるのに氣がつきだしたやうだ。この空前の大凱旋式を、言ひがたい沈默の空氣で包むものは、實にこの目覺めだ。若しこの凱旋式が歴史的事件だといふならば、それは、その

外見の事件ではなくて、それを包む重い冷たい空氣の示す沈默だらう、感激ではなくて默想だらう。しかり、群集の中に開けかゝつて來た一つの共通の默想の國だらう。この國の領土は徐々に擴がつていかずにはゐないだらう。



プラタヌスの葉

七月中旬の日は、華やかな光を總べての上に注いではゐるが、なんとなく秋の日のやうなうら寂しさが行き循つてゐた。私には今もその感じが思ひ出される。セエヌの流は平日と變らぬ靜けさを見せ、動くとも思はれぬその水は、両岸のプラタヌス(Platanus)の青葉の影を沈めてゐた。儀式は早朝から正午まで續いた。午後からは各方面で分

列式が行はれた。夜は、仕掛煙火と街上の舞踏とイルミネーション（Illumination）とで、全市は一時狂ふばかりに見えはしたが、暗黑の闇は間もなくこの狂喜を取鎭めて、また冷靜な姿に立返らせてしまつた。

二四　小さいものよ

有島武郎

お前達は、去年、一人の、たつた一人の母*を永久に失つてしまつた。お前達は生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間、或雜誌社から、「私の母」といふ小さな感想を書けといつて來た時に、私は何氣なく、「自分の幸福は母が最初から一人で、今も生きてゐることだ。」と書いてのけた。そして

有島武郎　東京市の人。明治十一年生。文學者。
母　名は安子、明治二十二年生。男爵神尾光臣二女。

私の万年筆がそれを書き終へるか終へないのに、私はすぐお前達のことを思つた。私の心は悪事でも働いた時のやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前達は不幸だ。恢復の途もない不幸だ。不幸なもの達よ。

お前達が六つと五つと四つになつた去年の八月の二日に死が殺到した。死が凡べてを壓倒した。

お前達の母上の遺言書の中で一番崇高な部分は、お前達に與へられた一節だ。母上は血の涙を飲みながら、死んでもお前達に會はない決心を飜さなかつた。それは病菌をお前達に傳へるのを恐れたばかりではない、また、お前達を見ることによつて自分の心の破れるのを恐れたばかりでも

ない。お前達の清い心に殘酷な死の姿を見せて、お前達の一生を彌が上に暗くすることを恐れ、お前達の伸び〳〵ていかねばならぬ靈魂に少しでも大きな傷を殘すことを恐れたからだ。「幼兒に死を知らせることは無益であるばかりでなく、有害だ。葬式の時には、女中をお前達につけて、樂しく一日を過させて貰ひたい。」さうお前達の母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日のひかり
　世より世を照る大きさに似て」

とも詠じてゐる。

母上が亡くなつた時は、お前達は信州の山の上にゐた。若しお前達に母上の臨終に會はせなかつたら、一生恨に思ふ

だらうとさへ書いてよこしてくれたお前達の叔父上に強ひて賴んで、お前達を山から歸らせなかつた私を、お前達が殘酷だと思ふ時があるかも知れない。お前達はまだ小さい。お前達が私の齡になつたら、私のしたこと、即ち母上のさせようとしたことを、價高く見る時が來るだらう。

今は夜中を過ぎて、時計は一時十五分を指してゐる。しんと靜まつた夜の沈默の中に、お前達の平和な寢息だけが幽かにこの部室に聞えて來る。深夜の沈默は私を嚴肅にする。私の前には、机を隔ててお前達の母上が坐つてゐるやうにさへ思ふ。その母上の愛は、遺書にあるやうに、お前達を護らずにはゐないだらう。よく眠れ。不可思議な時といふものの作用にお前達を打任せてよく眠れ。さうして、

明日は昨日よりも大きく賢くなつて、寢床の中から跳り出して來い。私は私の役目を成し遂げることに全力を盡すだらう。私の一生がいかに失敗だらうとも、また私がいかなる誘惑に打負けようとも、お前達は私の足跡に不純な何物をも見出し得ないだけのことはする、きつとする。お前達は私の斃れたところから、新しく歩み出さねばならないのだ。しかし、どちらの方向にどう歩まねばならぬかは、微かながらにもお前達は私の足跡から探し出すことが出來るだらう。

小さいものよ。不幸なそして同時に幸福なお前達の父と母との祝福を胸にしめて、人の世の旅に上れ。前途は遠い、そして暗い。しかし、恐れてはならぬ。恐れないものの前

に道は開ける。行け、勇んで。小さいものよ。

二五　我が父母

新井白石

我、物の心を辨へしよりこの方のことは覺えしに、父が日々のことたゞ同じさまにして、つゆたがふところおはせざりけり。寅の時ばかりには必ず起き出で給ひて、水をもて身を洗ひ滌ぎて、自ら髪取上げ給ひき。夜寒き頃は、母にておはせし人の、「我も齢の傾きぬれば、夜寒に堪へず。」とて、圍爐裏に火を埋みて、それに足さし臥し給ひて、鑵子に湯を入れて、火の邊にさしおいて、父起き出で給ふ時に、その湯を參らせられたりき。

二人ともに佛の道をたふとみ給ひしが、父にておはせし人

新井白石　名は君美、江戸の人、德川中世の政治家・學者、享保十年（一七二五）歿、年六十九。

父　名は正濟。

寅の時　今の午前四時頃。

の、髪取上げ果てては、衣裳改めて佛を禮し給ふこと曉毎に怠り給はず。父母の忌日には、手づから飯を炊ぎてすゝめられ、下部等に命ぜられしことあらず。夜未だ明けざるほどは、坐してあしたを待ちて、夜明け果てて出仕し給ふ。父のおはせし處は南にありて、出仕し給ふべき門は北にありしに、朝には東よりし、夕には西より道し給ふ。雪蹈とて革を底にしたるものを召して、いかにも足音の高らかに聞ゆるやうに過ぎ行き給ひしかば、我が父の來り給ふは皆人の聞き知りしほどに、幼き子もその啼をとゞめたりき。我が物覺えしよりは、髪に黑き筋は少かりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、丈は短くおはせしかど、すべて骨太く逞しく見え給ひたりき。天性喜怒の

色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふにも、聲高く笑はせ給ひしことは覺えず。まして人を叱り給ふには、あら〳〵しきことを宣ひしことを聞かず。物宣ふことも、いかにも言葉少くして、たちゐかろがろしからず。驚き給ひ、騷ぎ給ひ、事に堪へかね給ひしなどいふことは見しことあらず。たとへば、灸治などし給ふにも、灸小さきと數少きとは無益のことなり。」と仰せられて、大きなる灸をその數少からず、五所も七所も一時にすゑさせて、痛ま

新井白石

せ給ふ氣色も見え給はず。

身靜かなる時には、常におはします所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけて、花瓶には春秋の花を少しく挿みて、それに對して默坐して日を消し給ひ、また自ら繪かき給ふこともありき。それも色をまうけたる繪などをば好み給はず。

身の病み給ふ時より外は、人を召して使ひ給ふといふことなく、何事も皆手づからなし給ひたりき。朝夕の物を召すことも、飯は二椀を過ぎず。「手して椀をさゝぐるに、その輕重によりて飯の多き少きは知れぬれば、その餘物は飯の多少によりて多くも少くも食ひて、常に我が腹に滿つる分量を過すべからず。一口にかなふものなりとも、一色をのみ多く食ひぬれば、必ずそのために傷めらるゝことあり。何物

をも擇ばずして、皆々少しづつ食ふ時は、互に相制するところあるにや、食のために傷めらるゝことは少しと覺ゆるなり。」と仰せられき。

世の常には、こなたより參らするものをめして、何物を參らせよと宣ひしことはあらず。たゞ「四時の新味をば、その出で來りし初に、何物に限らず參らせよ。」と仰せられて、家人とともに聞し召しけり。

酒は僅かも喉に下し給はば、大きに醉ひ給ひしかば、たゞ盃を把りて歡を受け給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。身にめしけるものも、家におはする時は、洗ひ濯きしものをもめしけれど、垢づきぬるをば、いね給ふ時もめすことなく、門を出で給ふに至つては、必ず新しく鮮かなるものを

めす。それも身におひ給はぬ品の物用ひられしことはあらず。「むかし人は、常に身死しなん後の見苦しからぬやうを心にかけしなり。」など宣ひたりき。「扇子などをも、人多き中に取りも落し遺れもすることあり。これらのものにても、その主の心は推し量らるゝことなり。」と仰せられき。

我が母にておはせし人は、ものよく書き給ひしのみにあらず、歌の道をも傳へ習ひて、代々の集または物語の類など、我が姉妹に讀み教へ給ひ、圍碁・將棋なども、堪能におはして、これらのことをも我に教へ給ひたりき。香爐箱の中に琴の爪を袋にして入れおかれしを見しことあれば、これらのことをも好き給ひしにや。我が見まゐらせしよりは、「織り縫ふことこそ女の業なれ。」と仰せられて、年毎に美しき筋の布

といろ〳〵の文ある絹を、みづからも織り、人にも織らせ給ひ、それを父にもめさせ參らせ、我にも賜はりしが、今も少しは家に殘れり。賤しきものの言葉に、「似たるものの夫婦とはなるなり。」といふことのあるが、ものの宣ひ、爲し行ひ給ふことどもの、父にておはせし人にたがふところなくてぞおはしましたりける。父の致仕し給ひし後には、これも髪おろし給ひて、佛の道をいみじく行ひ、六十三にて終り給ひき。

二六　良寛の遺蹟

相馬御風

私は案内者を得て出雲崎へいつた。出雲崎は寺泊から海岸に沿うて歩けば四里ほどの道程しかなく、それに、良寛が歸國當時假の宿りを求めた郷本といふ村もその中途にあ

相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、文學者。
良寛　越後國の偉僧、天保某年歿、年六十餘。
出雲崎　新潟直江津間の海岸。
寺泊　出雲崎の東北
歸國　二十餘年間中國九州を行脚して寛政十一年歸つた。

るから、私はその道を取らうと思つたのであるが、前々日の暴風で、道がひどく壞れてゐるといふので、已むを得ず汽車でいくことにした。寺泊から長岡鐵道に乘り換へて、そこから四つ目の驛が出雲崎である。

僧　良寛

しかし、出雲崎の町は、そこから北へ山一つ越えた一里先にあつた。私達は、先方へ約束しておいた時間もあつたので、そこから更に人力車に乘つた。道は車に乘つてゐるのが却つて苦しいほどの山道だつた、眼の下に谷合の村を見て通るやうな處もあつた、今にも倒れさうに突立つた崖の下をびく〳〵しながら通るやうな處もあつた。

さういふ間を通りながらも、私の想像裡には、時々、そのあたりの道をとぼ〳〵と辿つてゐる一人の托鉢僧の姿がちらついて見えた。

出雲崎いにしへ人のふみにけん
道をたどりてわれは行くかも

出雲崎良寛の歌。

かういつたやうなこともしみ〴〵感じられた。

こんな風にして、ほゞ一時間も過ぎたかと思つた時、車はとある小山の端を廻つた。と、その刹那、私達の眼の前に、突如として、海――廣々とした海が展開した。その刹那の驚きと快さとは、全くいつて見やうのないものだつた。私は思はず感歎の聲を發した。佐渡の島山は、こゝでは、今まで私がどこで見たよりも鮮かに美しく見えた。

荒海や佐渡によこたふ天の川

から芭蕉*の歌つたのも、こゝであればこそと思はずにはゐられなかつた。

出雲崎の町はすぐ眼の下にあつた。つい先頃燒けたばかりの燒跡を中央にして、東西に一本長く〳〵伸びた眼下の港町は、私の眼にはたまらなく懷かしく、見えた　我が良寛の生れた町、我が良寛の育てられた町そして我が良寛が剃髮した町。

坂を下つて出雲崎の町へ入つた私達は、まづそこの知人を訪ね、その指圖で、同じ町の某旅館に入つた　案内された部屋は、海の中へ造り出した中二階で、欄に倚つて見れば、すぐ座敷の下で波が打つてゐる。　廣々とした海の眺、翠に浮ぶ

芭蕉　松尾氏、名は宗房、伊賀國の人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

佐渡の島もゐながら見ることが出來た。

古にかはらぬものはありそみと
天も水もひとつに見ゆる海の上
向ひに見ゆる佐渡が島なり
浮び出でたる佐渡が島山

からした良寛の歌が、おのづと口ずさまれるのだつた。私はやゝ暫く窓に凭れて、眞夏の日に照されてゐる海を眺めてゐた。

港内には、僅か二三艘の小さな荷積和船の外、何物の影も認められなかつた　見渡すかぎり、港内にも港外にも波のうねりは殆どなく、海はまるで眠つてゐるやうに見えた。海の向ふに長く横たはつてゐる佐渡の島は丁度夢の中で見

る山のやうだつた。右の方には、遠く突き出た岬の上に、高く彌彦の山が端麗な姿を現してゐる。凡べては靜かだつた、凡べては夢のやうだつた。しかし、かうした靜けさの中にあつても、私はいつとはなしに、秋から冬へかけての日本海の荒れ模樣を思ひ合せずにはゐられなかつた。そしてそれと同時に、今かうして夢のやうな靜けさの中に浸つてゐるこの町の、その頃の物凄さや淋しさをも想像しないではゐられなかつた。

こんなことを思つてゐる中に、私の心は、やはりいつの間にか、良寛その人への聯想を喚び起して、私が今對してゐるこの自然を、朝な夕な見つゝ育てられた彼の少年時代乃至青年時代の初期のことなどを頭に浮べてゐた。ふと、間近の

彌彦山　越後國、籠に彌彦神社があるる海拔二〇七九尺

波打際で、ばちや〳〵泳いでゐる五六人の子供の群が眼に止つた。私は、彼等の中にも、少年時代の良寛の俤を求めた。そして口碑を思ひ合せて、幼い頃から他の子供と交ることをあまり好まなかつたといはれてゐる少年榮藏*が、たゞ一人群から離れて、ぎら〳〵と日の照る岩の上に坐つて、ぼんやり海を眺めてゐた姿を空想に描いたりした。

たらちねの母がみ國と朝夕に
佐渡が島べをうち見つるかな

またしても良寛の歌が思ひ出された。彼はさうした懷かしさを以て、朝夕に、あの夢のやうに見える佐渡の島山を眺めつゝ、更にその島を舞台にした古來のさま〳〵な時代的犧牲者の悲劇について、とりとめのない空想を描きながら、

榮藏　良寛の幼名。

いつまでも〳〵磯邊に立ち盡してゐたことだらう。また雪と嵐と涙とが凄じく荒れ狂ふ冬の日などには、終日薄暗い家の内に閉ぢ籠つて、深い〳〵瞑想に耽りながら時を過したことだらう。私はそんなことを樣々に想像しながら、旅館の夜の更けていくのも忘れてゐた。

二七　旅にある友へ

樋口一葉

軒端に山あり垣根に川ある佗住ひかも主は旦那樣の佗弟子にさへいらせゝるゝ由憂き旅なぎゝは佗託言(かこと)よて羨みねとぞ聞え侍　さもあれダ此雲に日の照りて松風あるもれに吉づるい時都の空思しめし出でらるゝは實ふ〳〵

樋口一葉（名は夏子、山梨縣の人、文學者、明治二十九年歿、年二十五。）

ぞ思ひやり聞えさせ侍　扨も昨日も今日も雨淋しくいつも佗入るの時めで給ひし隣家の琴此音あきばかり慰めにしを過し中ゆ佗出立の後まだ僅よ侍へどもこれ程に変りしことも私宿への曲り角よ舟板塀をかしく漏戸もの、表札の書たる女名前も佗家のありしかも佗前樣佗同藩のなにがしとやらゞ控家と佗仰ふ侍ひしが五日ほど前の夜物置に火を放ちしもの侍うて索く焼け失せ中侍　往き来よ見上げて懐ゝしと思ひし一もと松思もぬ煙に成り侍うて殘奈このきとに侍

嬉しきこゝに指を折まゞ宿の小犬の病此癒え

ゐる失せぬと思ひし頃載の歌集見出でたる勝手元働くいとらき女の系譜ゐるなかそれより
も妹ぶ伺の支度まとは古お談話ひ一染物あぶ至殊ふ見事まて少しも派手ることなく尚人の
喜一重に活動ゆ点と辱く嬉しく俗日毎のやうふお国もじ一てなほ抱是らぬ心地に俗ひしをまし一てこの夕の淋しさ文系らせたきにも古富り定まらねど伺とこのはし光はん日こふ古の異疫ヤ出して古妹ま笑も道中ゆ古帰京も来手とやゆるく〜の活歩きま書き集め給はん古旅日記拝見いつ迄楽しみ居俗　こ北次の活文もまたいつ頃のお便りなるべき我

の程いと待遠まも俗この外　やうで時雨れん紅葉北蔭ま古風めさぬやう活心用ひあらまほしくそのこと彩ゑゆ　かしこ

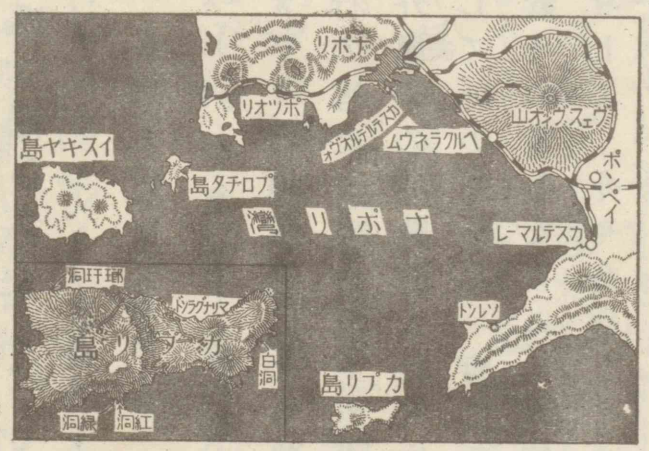
濱田青陵

二八　カプリ島の風光

朝早く起き出でて、カステル、デル、オヴォ（Castel dell'Ovo）の埠頭近くより船に乗れば、はや甲板の上はカプリ（Capri）行の客にて充ち満ちたり。船の名を「女王エレナ（Elena）」といふ。鷗外漁史の「即興詩人」にて知り初めたるカプリ島の景色や果していかならん。實に我等がこの書を耽讀せしは、はや十餘年の昔となりぬ。我等はいかにイタリーの風物に憧憬せしよ。今や身親しくカプリ（Ischia）観光途上の人となりて、我が胸は將に躍らんとす。

濱田青陵、名は耕作、大阪府の人、文學博士、京都帝國大學教授。
鷗外漁史、森林太郎、島根縣の人、文學博士・醫學博士・陸軍軍醫總監、帝室博物館總長、大正十一年歿、年六十三
即興詩人、二冊、鷗外譯、アンデルセン（1805—1875）原著。

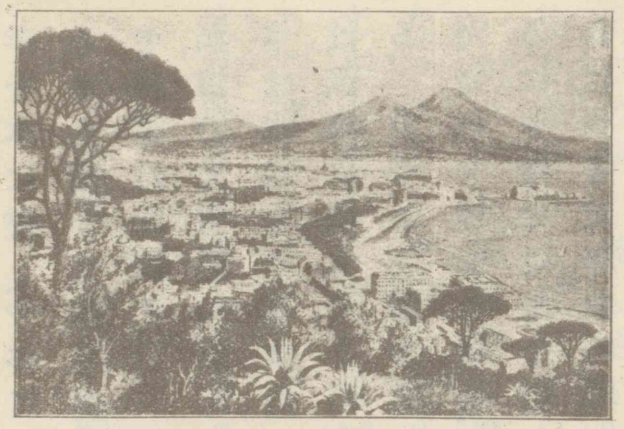
ヴェスヴィオ[Vesuvio]の山は薄霞に裏まれて影定かならねども、ナポリ[Napoli]灣の眺なほ美しさを減ぜず。カステルマーレ[Castellammare]の沖を過ぎて、ソレント[Sorrento]に着きしは十時頃ならん。カプリの島はやうゝ近くなりぬ、竹生島・江の島よりは遙かに大なり。山骨あらはなるこの島は、もとより青螺の美しきに譬ふべくもあらねど、マリナ[Marina grande]、グランドの岸に船を停むれば、我等はまづその海水の碧藍なるに驚かされぬ。船はやがて島の北西なる琅玕洞に向ふ。洞の外面は斷崖、



ヴェスヴィオ山　ナポリ灣東岸の活火山、海拔四〇二〇呎。

竹生島　琵琶湖の北部にある島。

江の島　神奈川縣鎌倉郡川口村へ片瀨、陸を距ること數町。



ナポリ市及びヴェスヴィオ火山

何等特殊の奇勝をなせるにあらず、たゞ一箇の黑點の水平線上に現るゝのみ。洞の前には數十の短艇我等を待ちて、一艇に二人づつを乘せて洞に進む。既にして洞口に漕ぎ寄すれば、口は低くして、舟中なほ我等の頭を屈するにあらざれば入りがたきほどなり。されど一たび口を過ぐれば、内は廣くして數十疊を敷き得べく、天井は高くして一大穹窿をなす。倏ち見る、舷下の水は紺青を溶したるが如く、日光は倒さまに洞窟の下より透徹

して、窟内の万象舟も人も悉く碧瑠璃の色をなす。試みに手を水に浸し、やがてこれを水面上に揚ぐれば、雫滴るところまた閃きて、流星の群の摧くるが如し。あゝ、何等の奇觀ぞ、何等の壯觀ぞ。

洞口の光明忽ち消えて、他の舟は窟内に入り來りぬ。その さま水底より浮び出づるが如く、斷續また斷續。やがて舟は洞内に滿ちて、その櫂の滴悉く青き火花を散すかと過たる。少年あり、客の海中に銀貨を投じ與ふるや、水底に沈んでこれを捉ふるさま、恰も幻像を見るに似たり。潮滿ち來るにや、舟夫は舟を留むること久しからずして洞穴を出づれば、我等は神仙の境より脱して、再び「女王エレナ」上の人となる。

カプリの島には、琅玕洞の外、紅洞・緑洞など奇勝少からざれど、この洞の美しさに若くものなしといふ。否、世界にその比を求むるも、恐らくはこれに勝るもの多からざらん。サイモンズ*も、「無言劇の魔界を他にして、この洞の如き奇觀は、たゞアレッチュ*の大氷河の洞窟にこれを見たれども、その光彩の變幻これに及ばず。」といへり。この洞久しく世に隱れて知られざりしが、一千八百二十六年、コーピシュ*この洞穴に泳ぎ入りしより、その美始めて世に傳はりぬ。

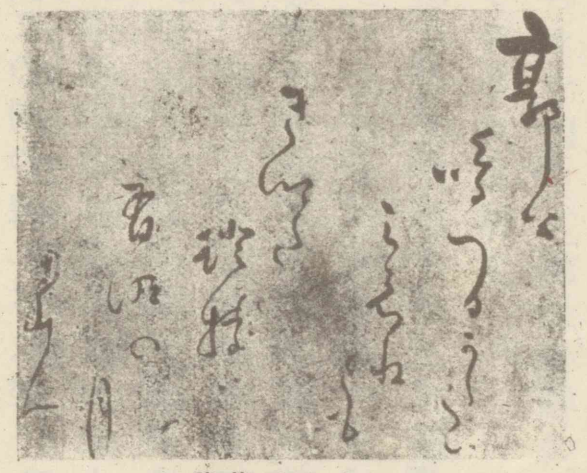
二九　狂歌

四方赤良

生醉の禮者を見れば大道を

サイモンズ　英國の文藝批評家。(1840—1893)
アレッチュ　スウィス中部にある大氷河。
コーピシュ　ドイツの詩人。(1799—1855)

四方赤良　本名太田覃、號は南畝、蜀山人、江戸の人、德川末期の狂歌師、文政六年(一八二三)歿、年七十五。



四方赤良筆蹟

横すぢかひに春は來にけり
早蕨が握拳を振上げて
山の横面はる風ぞ吹く

ほと*ゝぎす
啼きつる跡に呆れたる
後*德大寺の有明の顔

すみ*だ川
今は吾妻の都鳥
業*平などは在五中將

郭公鳴つるかたはみえねどもきいた證據は有明の月　蜀山人

ほとゝぎす　時鳥啼きつる方をながむれば只有明の月ぞ殘れる。（後德大寺實定）

後德大寺　藤原氏、源平時代の人、左大臣、歌人、建久二年（一八五一）歿、年五十三。

すみだ川　隅田川、武藏國荒川の下流。

業平　平城天皇の皇子阿保親王の第五子、在原姓、右近衛中將、元慶四年（一八八〇）歿。

富士の山夢に見るこそ果報なれ
路銀もいらず草臥れもせず　鯛屋貞柳

ほとゝぎす自由自在に聞く里は
つむり光　酒屋へ三里豆腐屋へ二里　宿屋飯盛

飯盛筆蹟

歌よみは下手こそよけれ天地の
動き出してはたまるものかは

鯛屋貞柳　榎並氏、大阪の俳人、享保二十年（一七三五）歿、年八十二。つむり光　本名岸誠之助、江戸の狂歌師、寛政八年（一七九六）歿、年七十。

宿屋飯盛　本名石川雅望、江戸の文學者、文政十二年（一八二九）歿、年七十。

歌よみはへたこそよけれ天地のうごきいだしてたまるものかは　飯盛

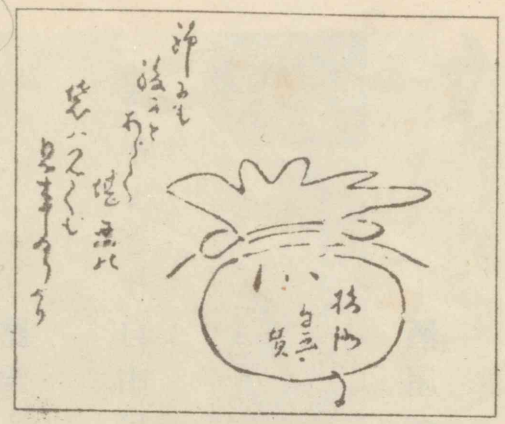
天地の力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。（古今集序文）

世の中は何のへちまと思へども
ぶらりとしては
くらされもせず

木端

山里は散りし
紅葉の錦をも
木綿ほどには
思はざりけり

朱樂菅江



唐衣橘洲筆蹟

菜もなき膳にあはれは知られけり
しぎやき茄子の秋の夕ぐれ

唐衣橘洲

木端　丸子氏、江戸の俳人、安永二年（一七七三）歿。

朱樂菅江　本名山崎景貫、江戸の狂歌師、寛政十年（一七九八）歿、年六十三。

錦にも綾にもあらで堪忍の袋は見ても見事なりけり　橘洲畫白贊

唐衣橘洲　本名小島泰從、江戸の狂歌師、享和二年（一八〇二）歿、年六十。

菜もなき心なき身にも哀れは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮。（西行法師）

眞顔筆蹟

鹿都部眞顔

手はぬ風の柳の糸にこそ
堪忍袋ぬふべかりけれ

馬場金埒

雪をらばいくら酒手をねだられん
花のふゞきの志賀のやまかご

作者不知

泰平の眠をさますじようきせん
たつた二杯で夜もねられず

鹿都部眞顔　本名北川嘉兵衛、江戸の狂歌師、文政十二年（一八二九）歿、七十七。

あらそはぬ風の柳のいとにこそ堪忍袋ぬふべかりけり　眞顔

馬場金埒　本名大阪屋甚左衛門、江戸の狂歌師、文化四年（一八〇七）歿。

雪ならば幾たびか袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越。

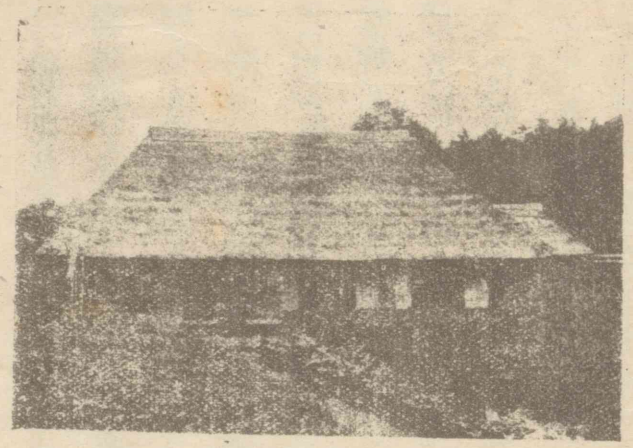
三〇　櫻町陣屋

横山健堂

*櫻町陣屋は*報德宗の大本山なり。二宮尊德先生はその生涯の中最も長かりし年數をこの一處に送り、その間に報德宗を建立せり。即ち先生の人物・事業を識らんと欲するものは、その教義の大成が此の如き、*寒僻の下國に行はれたることを見ずんばあるべからず。

陣屋の遺蹟は茅屋一棟蕭然として畑の中にあり。昔の土手も今日は既に半ば除かれて、たゞその一部分を存するのみ。茅屋の斜に後に雜木林に沿ひて報德神社あり。祠は甚だ荒れて畫趣を呈せり。

當年の陣屋は現存茅屋の二倍以上の大いさを有せしなるべしと想はる。尊德先生の門人數十人も一時皆この中に寄宿せしなり。現存の茅屋は僅かに先生の居宅を存するのみ、横に長く平かなる極めて平凡なる廢殘の茅屋は、報德宗の開祖が堅苦力行せし遺蹟なり。客座敷の縁側に近く小池あり、二宮先生の足洗池と唱ふ。先生が薄暮村内の巡視より歸り來り、足をこゝに洗つて座敷に上りしところといふ。我が輩もまた實にこの縁側より上れり。



現在の櫻町陣屋

横山健堂、名は達三、山口縣の人、明治五年生、文章家。

櫻町陣屋　二宮尊德の舊居、下野國芳賀郡物井村、今の物部村、眞壁の南一里、小田原藩主大久保家の分知、宇津氏の采邑。

報德宗　二宮尊德の教をいふ。

二宮尊德　通稱金次郎、相模國の人、德川末期の經濟家、安政三年（一八五六）歿、年七十。

寒僻の下國　下野國を指す。

客座敷は八疊にして、次室は十疊あり。八疊には床の間もあれど、十疊にはこれなく、戸棚あり、十疊の緣側の柱に、「下野報德社本部」の看板を掲ぐ。十疊の奥はこの日の雨に雨漏滂沱たり。大いなる盥・桶を並べて雨漏を受けつゝあり。尋常人家たらしむとも、雨日此の如き慘澹たる光景、人をして酸鼻せしむるものなくんばあらず。而してこの十疊こそ實に二宮尊德先生の居室たりしなれ。

櫻町に於ける先生の遺事は、口々語り傳へてなほ多くこの地方に存す。されど先生を見たるもの殆ど生存せず。即ちこの茅屋に來り、その遺事を聯想し、この舞台に活躍せしめて瞑想すれば、先生の面目髣髴として見るが如し。

報德記の著者富田高慶は尊德先生の女婿なり。富田は夙

この日　作者のいつた日。

富田高慶　磐城國中村藩

に尊德先生の名を慕ひ、江戸より相馬に歸るの途、來りて謁を求む。先生面會を肯ぜず、「予は學者を好まず。」といふ。日は暮れ、旅館はなし。村役人富田を憐みその家に延いて宿せしむ。淹留數日の間に、富田の人物先生に聞ゆ。乃ち使を遣りて面會を求む。

富田は儒者なり。始めて先生に謁するや、鞠躬如として態度甚だ謹めり。先生突如として問うていふ貴下は豆といふ字を識れりや。」と。「識れり。」と答ふ。乃ち家人を呼んで紙筆を齎さしめ、豆の字を書せしむ。富田謹んで書す。先生更に僕を呼び厩より馬を緣側に牽き來らしめ、箕に豆を盛り、富田の豆の字と並べて馬の鼻端に出す。先生、富田に謂つて曰く、「馬はいづれの豆を擇ぶべきか。」と。富田一語なし。

士、二宮尊德の高弟、明治二十三年歿、年七十七。

相馬　今の福島縣相馬郡中村町。

先生更に問ふ、「豆ありて豆の字ありや、豆の字ありて豆ありや。」と。

尊德先生は審かに自然を觀察し、理法を自然の中に自得したる人なり。自然を研究するものは、人國記の所謂下國に於てするも妨げず。到る處に練思の材料あり。松陰先生が「擧頭觀宇宙、大道到處隨。」といへるも、這般の心境に外ならず。富田は多く書を讀みたるも、自然を識らず。自然は本にして、書卷は末なり。富田の書卷は先生の自然に屈したるなり。而して先生が豆と馬とを以て富田を開眼せしめたる緣側は、即ち我が輩が靴を脫して上りし緣側なるべし。英雄は吠畝の中より起り、哲人は書卷の間より出でず。」北條早雲が孫子の一句に悟り、尊德先生が田園の中に報德宗

人國記　北條時賴の著といふ。

松陰　吉田氏、名は寅次郎、萩藩士、幕末の志士、安政六年（一八五九）歿、年二十九。

北條早雲　名は長氏、伊勢新九郎、永正十六年（一五一九）歿、年八十九。

を創建したるも、自得するところはいづれも異らず。たゞ自然と實地との二語にあり。

櫻町陣屋は茅屋蕭索として、宛然南畫の山水の好背景をなすべき村家なり。この村家を離れて報德記を讀めば、尊德先生に書卷の氣あり。この村家に就いて、雨漏の居室に當年先生が寤寐にも筆を捨てずして報德教の案件を起草せしを思へば、彼は自然の生める哲人ならずんばあらず。

三一　春日局

岸上操

かねて期しつることながら、昨日まで綾羅錦繡を纏ひし身を荒栲衣に着更へしのみか、水汲み薪樵る業を助くるはただ一人の老僕のみ。山風寒き埴生の小家に、良人に事へ、子

孫子　支那周代齊の孫武の撰した兵法書。

岸上操　號は質軒、字は都宮市の人、史學・漢詩に長じてゐた、明治四十一年歿、年四十七。

良人　稻葉正威。

を育み、炊ぎ・濯ぎに日を暮しつ。夜は微かなる孤燈の下に、麻紡み糸繰りて更かすこと多く、他所の見る目は厭はしけれど、更に厭はしげなる氣色も見せず、まめ〳〵しく勞き勤めて、ひたすら良人を慰めけるが、生先永き稚兒達の、賤が子等と遊び連れて餘念なげなる樣を見ては、さすがに優しき母心の、あはれ、由緒ある武士の兒と生れながら、一生を花咲かぬ埋木となしおほして、賤山がつらと等しなみに朽ち果てさせんことのいかにも哀しき極みにこそ」と、人知れず歎かれて、窃かに手織布子の窄き袂を濕しけんも幾度ぞ。

稚き兄弟は以前の榮華を忘れ果てて、獵師・木樵の子等に馴れ睦みて、母が苦心を知るよしもなく、日々に野山に遊び暮し、見やう見眞似に、兎追ひ柴採る業さへまねびつゝ、互に伴

兄弟　正勝・正定・正利

とし往き交ふほどに、あたりの兒等は、山刀・鍬・鎌の外見慣れぬ眼に、貴重なる具足・調度など見出でて、權次・太作の親々に歸りてかくと物語れば、物識めきたる老人どもは、「さてこそ彼處の浪人殿は、たしかに京の歴々方が流されてがな來られたに相違あるまい。兄弟の子も、母ぢやの躾がよいやらして、惡戯はしながら行儀がよいぞ。」と鼻うごめかせば、「深い山には猪・鹿の種が盡きぬに、痩せても枯れても京の歴々の果ぢやとならば、金の茶釜の一つ二つはあらうも知れぬ。」と、何心なき里人の噂を、いかにしてか野伏・山賊どもの聞き知りたりけん、「さらばかの家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。よき隙あらば忍び入りて、我等が榮耀の資本にせん。」と、窃かに語らひつゝ覘ひゐたりとは、神ならぬ身のもと

より夢にも知るよしぞなき。

主人稻葉正成、ふとかりそめの感冒の心地して打臥したるが、思の外に病勢募りて、いと、いたう勞れ果てたり。さらでだに、かひがひしくまめやかなる福女は、良人の病にかゝりけるより、日夜帶をも解かで、看病少しも怠なかりけるが、その眞心や通じたりけん、今宵は熱も稍低うなりしと覺えて、心地もさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病にさこそは疲れ候ひつらめ。暫しがほどだにまどろみて、身體を勞はり候へ。」と、情ある良

春日局

稻葉正成　美濃國の人、稻葉一鐵の子。

福女　春日局の本名。

人の言葉、むげに否まば、なか〳〵に病のために惡しかりなんと思ひければ、快く、「さらば暫しがほど御免賜はれ。」とて、久久にて己が臥床に入りたれど、病める良人がこと、稚兒のうへ、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。をりしも冴ゆる嵐につれて、遠寺の鐘の聞ゆるを、數ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是なき稚兒、寢顏に笑を含めるは、いかなる夢路をか辿るらん。さてもかゝる僻陬に人となりなば、いつ成り出づる期かあらんなど、またしても來し方行く末のことなど思ひ出でられて、眼はいよ〳〵冴えまさり、思はずも太き息のみ吐かるゝを、病める良人に悟られじと、强ひて小夜衣引被きて、睡れる樣を粧はんとせる折しも、枕邊の雨戸ぐわらりと引

明けて、忽ちばら〳〵と足音させ、はや眼の前に立現れたる四人の黑き人影は、問はでもしるき曲者なり。あまりの意外に驚きて跳ね起きたる福女、「何者ぞ。」と聲かくれば、「問はるるまでもなし。夜陰の稼をなすものなり。今宵夜更けて音づれたるも、この家に蓄へたる金銀財寶のあらん限りを申し受けんとてなれば、命惜しくば殘らず出して我等に捧げよ。否まば病みほうけたるこの家の主人より血祭せん。」と、簀子荒らかに蹈み鳴して息まきかゝるに、福女はつゆばかりも慌て騷げる氣色なく、「さる儀ならば無用なり。主人の病めるを覘ひて、女と侮り入りこみたる野伏の愚人ども、そも我を誰とか思へる。明智殿の御内に鬼と呼ばれし齋藤內藏助利三が息女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚かなれ。汝等如き盜賊に塵一つだに取らすべきかは。無禮の擧動、そこ動くな。」といひも終らず、床に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業物の大太刀おつとり、矢庭に二人を斬つて捨て、なほも漏さじと斬り立つるに、殘れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃げ走るを、福女は追うて庭まで出でたりしかど、如法の闇夜に、何方さして逃げ失せけん、蹤追ひかけん術なきのみか、病める人の上、稚兒の上、はたいたくも心にかゝれば、さまではとて取つて返しぬ。このこと誰いふとなく風評に上りて、「さては、心ざまの雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへすがへすもいみじき女性よ。」とて、人々語り繼ぎければ盜賊ども聞きおぢて、その後は隙を窺ふことなかりき。

明智殿　日向守光秀。齋藤利三　美濃國の人、

明智光秀の甥　稻葉一鐵の女婿。

紀ノ正恆　豐後國の人、後鳥羽天皇の番鍛冶、新太夫行平の子。

福女とは誰ぞ。讀む人ははや推せるならん。こはこれ婦女の鑑と世に知られし、德川三代將軍家光の乳母春日局その人なりけり。

自修文

一　小泉先生

厨川白村

贈從四位小泉八雲。かう書けば、知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には、日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神秘と空想との世界に生きるケルト民族のアイルランド人を父とし、昔歐洲の花やかな藝術と文明とを生み出したギリシャ國人を母とした純粹な西洋人だつた。アイルランドに育ち、フランスに學び、米國に人となつて、四海に家のない飄零の孤客であつた先生は、東海の果にあると傳へる蓬萊の國に憧れて、明治二十三年、始めて我が日本の國土に來られたのである。それはハーパー社の一通信員としてだつた。後、出雲にゐられた時、歸化して小泉八雲と名乘られた。近代英文學史上に於ける散文の巨擘として、歐米の文壇

厨川白村　名は辰夫、京都市の人、明治十三年生、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授

小泉先生　詩人、東京帝國大學文科大學講師、明治三十七年歿、三十五年。

神祕　靈妙不可思議で知ることの出來ぬ祕密。

飄零　さすらひ。

孤客　一人の旅人。

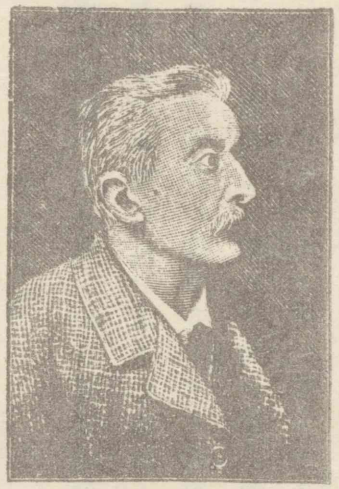
蓬萊　空想上の島の名。

ハーパース　米國ニューオルリーンズの書肆。

巨擘　大家。

には、先生のラフカディオ、ハーン（Lafcadio Hearn）といふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本の存在を知つてゐる英米人で、先生の名を知らないものは殆どなからう。

日本を今日のやうに西洋諸國に名高くしたのは、必ずしも數次の戰勝と國運の隆昌とだけではあるまい。これには先生の絢爛婉美の麗筆が與つて力のあることを思はねばならぬ。見給へ、たゞ觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書の愛讀者である、或は少くともその一



小泉八雲

二を必ず行李の底に納めてゐる人達ではないか。

朝廷が國家に對する功績を嘉せられて、故人に贈位の沙汰があつた時、たとひ歸化したとはいへ、純然たる白人をこれに加へさせられたことは、未だ曾て我が國の史上に類例のない聖代の慶事だつた。

數次　數回。
隆昌　さかん。
絢爛　美しく鮮かなさま。
觀光　見物。
功績　いさを、てがら。
沙汰　指令。
慶事　よろこばしいこと。

先生は如何にも風采の揚らない人だつた。痩身・矮軀、實に白人には珍しいほど小柄な人だつた。いつも前屈みに背を圓くして、ひよこ〳〵と歩いてゐられた。兩眼は殆ど視力がなく、左は盲目、右は眼球が大きく飛び出して、それがまた強度の近眼だつた。時々極めて稀にポケット（Pocket）から片眼鏡を出して、ちよつと右の眼に當てられる。その稀世の名文に寫されて日本の文物・人情・社會等の精透な觀察は、すべてこの弱い眼に片眼鏡を當てられる僅か十秒・二十秒間の凝視の結果だつたのだ。大きな眼玉をぎよろつかせてゐながら、心眼の盲ひた凡俗には、とても見えない或物を、先生はかうして常に鋭くもまた敏く觀破されたのだつた。

帝國大學の講師として、先生は年々歲々新しい題目で、新しい講義をせられた。固より準備にも相當に骨を折られたことだらうが、美しい、そしてよく整つた明快な講義の文章は、皆即座に、即興的に、先生の口から出たのだつた。學生に書取らせるやうに、考へながら、ゆつくりと、しかし、少しの淀みもなく語られた。時々は即興の散文詩ともいひたい美しい文句や奇拔な警句が、

痩身　やせたからだ。
矮軀　たけの短いからだ。
精透　くはしくてすきとほる。
凝視　見つめること。
凡俗　なみ〳〵な人。
觀破　見ぬく。
即興　その場でのくちずさみ。
奇拔　大層珍しいこと。
警句　すぐれて鋭い文句。

口を突いて出るのだつた。咳唾これ詩といへば古からう、錦心繡腸これを織りなした五彩絢爛の糸をほごして、繰つても〳〵縷々として盡きない趣は、實に鮮かだつた。銀鈴を振るやうなその聲は、またその文の美しいやうに美しく、抑揚高低にさへなんの不自然もなかつた。斷續しつゝ、一言また一句、皆よく聽者の胸底に詩の靈興を傳へるに足るものがあつた。ふと目を擧げて先生を見る時などには、大抵窓外を眺めながら、講壇のあたりをあちこちと靜かに歩いてゐられた。

天才といへば不規則なもののやうに心得てゐる人もあらうが、勤勉・努力の人だつた先生は、非常に几帳面で、鐘が鳴ると間もなく、重さうな風呂敷包に、美しい裝釘の詩集や文集を幾冊も入れたのを提げて、あたふたと教室にやつて來られる。講壇に上つて一揖し、ごく低い澄み渡つた聲で、「グッド、モーニング、ゼントルメン。」(Good-morning Gentlemen)といひながら、風呂敷包を解かれるのが常だつた。書物の中、本文として引用すべき箇處には、各〻しるしの紙が挿んであつた。時間の終近くなつて、その日、講義すべき部分が終りかけることがあつても、先

咳唾　せきとつば。
錦心繡腸　美しい思想。
縷々　絶えない形容
抑揚　おさへたりあげたりすること。
斷續　きれたり續いたりすること
靈興　すぐれた面白味。
几帳面　嚴格なこと。
裝釘　書物の表裝と綴方。
一揖　一禮

生は必ず鐘の鳴るまで何かしら話された。

講義の間の休憩時間には、一人で校庭をぶら〳〵と逍遙してゐられた。東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代からの古い〳〵大きな池がある。幾百年の齡を重ねた欝蒼たる喬木に取卷かれて、淀んだ水は溷濁の色をして、いつも黑かつた。池の彼方の小山の上には、俗に御殿と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好まれたのは卽ちこの池畔の逍遙で、例の前屈みに、そのあたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や葉卷を燻らしてゐられるのが常だつた。近づいて敎を乞ひたいことがあつても、私達は先生の靜思を妨げることを恐れて、滅多に側へはいかなかつた。落葉を踏みながら低回してゐられるその姿を遠くから望んで、先生の腦裏を往來してゐる美しい幻想の何物であるかを想像して見ることもあつた。

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから、常に煙霧模糊、さながら淡彩一抹の風景畫に對するやうに見えたのだらう。目には見ないで心

逍遙　さまよふ。
前田侯　舊金澤藩主。
齡　とし。
欝蒼　こんもり。
喬木　高く直立する木。
溷濁　にごること。
池畔　池のほとり
低回　さまよふ。
腦裏　心の中。
幻想　とりとめもない考。
煙霧模糊　煙やもやのぼんやりしてゐること。
淡彩一抹　うすい色どりを一なですること。

に見られたその印象は、遂に全き藝術的表現を得て、色彩の豊かな文字に寫されたのだ。鋭敏なその感性は、却つてこの極めて強い近視眼のために幸せられ、部分的な細微の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍する効果を收め得られたのだ。

二　來い〳〵螢

相馬御風

來い　來い　ほたる
大きな螢は高く　小さい螢は低く
林を拔けて　田圃を越えて
わたしの庭へ飛んでおいで

來い　來い　ほたる
子供が呼んだら高く　寂しくなつたら低く
小川に沿うて　草原拔けて

拂拭　はらひふく。
心裡　心の中。
活躍　生き〳〵とはたらく。
相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、文學者。

お池の水を飲みに來い

來い　來い　ほたる
わたしはお前を捕らぬ　籠の中へも入れぬ
大きな螢　小さな螢
みんなで仲よく飛んでおいで

三　東海道中膝栗毛

十返舍一九

東雲まだき驛路の忙しげにひきつるゝ朝出の馬の嘶に、旅疲の目を擦りながら、彌次郎、北八起き出でて支度し、爰を立出で、譽田の八幡を打過ぎ、それより鹽井川といふ處に至りけるに、昨日の雨強くして橋落ちにけるにや、行き通ふ人自ら股引を取り裾を捲き上げて爰を渉るに、彌次郎、北八もいざや引連れて渉りなんとする折柄、京のぼりの座頭二人連、この川の徒渉なることを聞きけるにや、一人の座頭、犬市モシ、川は膝ぎりも御座りますかな。」北さ

十返舍一九　本名重田貞一、德川末期の戲作者、駿府の人、天保二年（一七三一）歿、年五十七。六十八ともいふ。
東雲　夜あけ。
譽田　遠江國小笠郡東山口村八阪にある、日阪驛の南、八幡宮は縣社。
座頭　めくら。
膝ぎり　膝までとゞくこと。

やう、さやう、併し、水が早いから、お前方ァ危い。用心して渉りなせへ。」犬市「ハァ、なるほど水の音よつぽど早い。」といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、犬市「イヤ、こゝらがどうか淺いやうだ。コリャ猿市、二人ながら脚絆を取るも面倒だ。おぬし若役に己をおぶつて渉れ。」猿市「ハ、、、、ずるいことをぬかす。拳で參らう。なんでも負けたものがおぶつて渉るのだ、よしか。」犬市「コリャ面白い、サア來い、さんなむめで。」猿市「りやんごうさい、りやんごうさい。」と、片手で拳を打ちながら、兩方から左の手を出し、互に拳を打つ手を握り合ひ、犬市「サア勝つたぞ、勝つたぞ。」猿市「エ、いま〳〵しい。そんならこの風呂敷包を貴樣一所に背負はつせへ。ソレ、よしか。サア來い、サア來い。」と支度して背中を向ける。彌次郎「これは有難い。」と猿市におぶされば、猿市は連の犬市と心得て、さつさと川へはひり、難なく向ふへ渉ると、こなたの岸に殘りたる犬市、犬市「ヤイ、猿よ、どうする。早く川を渉さぬか。」猿市向ふの岸にて聞きつけ、猿市「コリャ冗談な奴だ。たつた今おぶつて渉したに、またそつちへいつておれを嬲るな。」犬市「馬鹿アいへ。おのればかり渉

おぬし　おまへ。

さんなむめ、りやんごうさい　右の二語は拳を打つ呼聲で唐音の訛である。「さん」は三、「むめ」は不詳、「りや」は二、「ごう」は五、「な」「さい」は添語

冗談　ふざけること。嬲る　からかふ。

鹽井川渉り（東海道中膝栗毛）

つて太い奴だ。」猿市「イヤ、太いとはそつちのことだ。」犬市「コリャ、おのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渉さぬか。」と、白い目をむき出し腹立つる故、猿市仕方なくまたこちらへ渡り歸り、猿市「サア、そんならおぶさりなさろ。」と背中を出す。北八、しめたと手を掛けておぶされば、猿市またさつさと川へはひる。犬市は大いに急きこみて、犬市「コレ、猿市、どこにゐる。」猿市、川の中にて、猿市「イヤ、こいつは誰だ。」と、北八を川の中へどんぶり落す。北「ヤァイ、助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をもがき流れる故、彌次郎飛びこみ引き上ぐれば、頭から骨まで腐るほど濡れ、北「エ、、、座頭めが、どんだ目に遇はしやァがつた。」彌「ハ、、、、ま

太い奴　不正直な奴。言語道斷　以ての外。

しめた　うまい、物事が自分の思ふやうになつた時にいふ語。

づ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう。」北「全體彌次さんが惡い。なんのおぶさらずとも宜いことに、お前が手本を出したから、ツイおれも。」彌「川へはまつたか、氣の毒な。ハヽヽヽヽ、それで一首やらかした。

はまりけり目のなき人と侮りてむくいは早き川のながれに、

北「エヽ、聞きたくもねへ。よしてくんな。アヽ、寒い〳〵。」と裸になり、がたがた震へながら着物を絞る。この内、座頭は川を渡り行き過ぎる。彌「こゝで干してもゐられめへから、着換を出して着やれ。どこぞで火を焚いて貰つてあぶるがいゝ。」北「エヽ、いま〳〵しい。風を引いた。ハアクッシャミ。」と、ぶつ〳〵小言をいひながら、着換を出して着換へながら、くさつた着物は絞つて引提げ、出掛けると程なく掛川の宿に至る。

掛川　濱松の東約八里。

四　思出の一節

三角錫子

三角錫子　石川縣の人、常磐松女學校長、大正十年歿、年五十。

二十一歳で女子高等師範學校を卒業した私は、すぐ札幌に赴任したが、それからの五年間は、たゞ單に職務の遂行者であつたといふに過ぎなかつたが、

明治二十九年六月、旅行中の父の突然の他界は、眞に私の覺醒を促した。父は最初私が北海道へ赴任する時、母を伴はせてくれた。隨つて、弟どもも母と一緒に來てゐた。そして、私の義務年限の終るまで、父は一人で暮してゐてくれた。父の方へ歸らうとすれば學校で引止められるので、父に郡長を辭職して北海道へ來て貰ふことにした。その途中、津輕海峽を渡る船中で腦溢血に罹つたのである。その時、傍にゐたものは十七歳の弟だけだつた。

五年間の不自由な獨棲を忍んで、愈〻今日こそ久しぶりに妻子に逢はうといふ樂しい日の朝、不幸にも急死したのだつた。

子煩惱だつた父は、子こそ萬金にも換へがたい寶と思つてゐたので、遺産といつては何もなかつた。殘つた家族は祖母と母と五人の弟と私とだつた。嫡男であるべき長弟は望のない子だつた。一家の頼みの綱は二十五歳の娘たる私にかゝつた。父の死去を悲しむ涙の眼はすぐ私の顔に注がれた。十七歳・十五歳・十歳・七歳の四人の弟も姉ばかり見てゐる。私の眼から落ちる一滴の涙は、家内中の涙を誘つた。私には泣くべき自由さへもなかつた。

校訓導として赴任した。
途行者　しとげる人。
父　名は風三。
他界　死去。
覺醒　さめること。
郡長　靜岡縣に奉職してゐた。
腦溢血　腦中の血管が破れて血液の溢れ出る病氣。
獨棲　一人で暮すこと。
子煩惱　子を非常に愛すること。
遺産　殘る財産。
嫡男　相續をする男子。
長弟　名は茂實。
四人の弟　工學士愛三・工學士謙三・醫學士康正・法學士武雄。

何を考へる間もなく、悲みに沈んでゐる私の耳には「子供は必ず大學へ入れたい。」と繰返していつた父の聲だけが鮮かに響く。私はなんとも言ひ知れぬ力に滿身の緊張を覺え、あらゆる自分の希望を捨てて、生活の道に働いた。しかし、何をいふにも二十五歳の女の腕で、いかに物價の安い時とはいへ、生活の樂なはずはない。力を合せるべき長弟には、骨身を削られるやうなことばかりされた。

三角錫子

次いで私の暗黑時代が始まつた。それは五年間の不幸な結婚生活を送つた涙の時代だつた。たゞ泣くより外はどうすることも出來ない苦しい苦しい時代だつた、長弟は遂に義絶せねばならなくなつた。寄宿舍生活の外には、一日とても別れ住んだことのない母とさへ、一緒に暮すことが出來なくなつた。浮世が厭はしかつた。全く死にたかつた。幾度書置を書いたか知れないが、母や弟のことを思ふと死ねなかつた。死ぬ自由を有つてゐる人が羨しかつた。

かゝる境遇から脱れて、漸く母の許に歸ることが出來て、久しぶりに母子兄弟打揃つた時の嬉しさよ樂しさよ。けれども、長弟の義絶が母に扶助料を受ける資格を失はせたので、生活は益〻苦しく、五年の間虐使した身體に一日の休養を與へる暇もなく、すぐまた敎職についた。かくて、まあ嬉しやと思つたのはたつた二箇月、五月二十八日の地久節に着るべき私の紋附を縫ひ返したのを最後に、母は病の床に臥した。この時の住居は東京の牛込中里町だつた。この邊は、その頃は、一歩足を踏み出すと早稻田田圃だつた。毎日眞夜中に病人の汚れ物を持つて、その田圃を流れる小川に洗濯にいつた。空は高く澄んで、北斗七星が鮮かに見える時だつた。洗濯を終へると、跣足のまゝ、小川の岸に腰掛けて泣くのが夜毎の仕事の一つだつた。自分の不運を嘆くよりも、幼くてまた一人の親に死に別れねばならない弟達が可愛相だつた。高等學校へ入學したばかりの弟の前途も遠かつた。どう成り

緊張　ひきしまること、はりつめること。

義絶　勘當。

扶助料　官吏などの死後政府からその遺族に給與する金子。

虐使　むごく使ふ。

行くかと思ふと、出るものはたゞ涙だけだつた。皆の眼は父の死んだ時よりも一層私の眼を追ひ廻した。私の一滴の涙は家中を洪水に浸した。私は泣くにも泣けなかつた。自由に泣くことの出來るのは、たゞ早稲田田圃の眞夜中より外にはなかつた。私ども同胞五人の心盡しの看護も祈念もその効なく、八十歳の老母と四人の男の子とを私に託して、母は遂にこの世を去つた。

一家は全く途方に暮れた。今までは、私は男のやうに働きさへすればよかつた。弟の世話はいふまでもなく、私の着物までも母が縫つてくれた。今からは、私は父であり母であり男であり女であらねばならなくなつた。そして、一圓に一斗六升の米は、六升になつた。小學生の弟は中學校に入學した。家賃の安い處へ〳〵と轉々として移らねばならなかつた。恐ろしい人生の旅路に安住の地を得ないぐらゐ悲しいことがあらうか。病氣の弟が病院通ひをする都合のために、駿河臺に引越した時などは、そこに一人の知人もないので、荷車を外に待たせておいて、空家の掃除にかゝり、やつと片

祈念　いのり。

駿河臺　神田區。

付いたかと思つた時には、もう日が暮れて、再び何をする勇氣も出なかつた。お蕎麥で夕飯を濟ませて眠に就いたものの、二疊・三疊・四疊半の小さい家の内を見渡し、こんな弱い姉を力に、もう安らかな夢を結んでゐる弟達の寢顔を眺めて、氷のやうに冷たい堅い胸を抱いて泣き明かした夏の夜が思ひ出される。「狐には穴あり、空飛ぶ鳥には巣あり。されど、我には枕する所なし。」といつたキリストの歎きに比べればなんでもないとはいへ、その時は身も世もない心地だつた。

長弟は「高等學校を退學して、徴兵に出て、そのまゝ軍人にならうか」といつた。も一人の弟は「商店に奉公しようか。」ともいつた。「四人も弟を抱へてゐないで、一人・二人は養子にやれ。」と或人に勸められた。また「一人を養子にくれゝば、あとの兄弟の學資を出してやらう。」と、熱心に望む人もあつたが、それも斷つた。たゞ斷念されないのは、弟は殘らず大學へ入れたい。」といふことばかりだつた。いける所までいかうと、弟二人に同時に第一高等學校の入學試驗を受けさせた。知人が呆れて愛想をつかしたのも無理はない。愈〻在學

斷念　思ひ切る。

證書を出す時になつて、保證人になつてくれてがない。「自分の努力で合格することの出來る入學試驗はなんでもないが、保證人は自分の力では作ることが出來ない。」と、弟達は泣いた。却つて一家の事情を全く知らない方々が保證人になつて下さつたので、やつと入學することが出來た。

こんな生活も、母の存命中は忍ぶのにも張合があつた。母亡き後の我が家の淋しさよ。同胞はたゞ冬の夜の塒の鳥のやうに小さく固まつて、互に暖め合うてゐた。口にこそ出さね、皆の心を襲つて來る淋しさはどうするこども出來なかつた。それでも、私には、こんな人生流離の巷からでも、旅路とはいへ、父母とともに住んだ數々の思出が美しい繪卷のやうに展開するが、私とともに放浪する四人の弟達には、どんな思出があらう。繰擴げられるどの繪も〳〵、定めし淋しい〳〵切れ〴〵なものだらう。

五　加茂の川原

落合直文

努力　ほねをり。

流離　さすらふこと。

展開　ひらく。

放浪　さすらふ。

落合直文　宮城縣の人。

母にとて我が書く文のふぶくろに入れてやらばや加茂の川原

北原白秋

はる〳〵と金柑の木に辿り着き巡禮草鞋はきかへにけり

土岐哀果

金少し持ちて逃げしをむしろやゝ慰めとするその親心

前田夕暮

赤き帶一つ迷へり洪水の町を見に行く群集の中に

島木赤彦

月の夜の霜白く降れり窓の外に驛の名呼びてとほる靴音

吉井勇

夏は來ぬ相模の海の南風に我がひとみ燃ゆ我が心燃ゆ

乘杉嘉壽

北原白秋　名は隆吉、福岡縣の人。

土岐哀果　名は善麿、東京市の人。

前田夕暮　名は洋三、神奈川縣の人。

島木赤彦　本名久保田俊彦、長野縣の人。

吉井勇　東京市の人、伯爵吉井幸藏の嗣子。

乘杉嘉壽　富山縣の人、明治十一年生、文部省社會教育課長。

六　社會奉仕と家庭

ニューヨーク市で、或一人の母が女兒を連れて市街を散歩し、市街の最も清

New York

潔に掃除されてある場所と、不潔のまゝに打捨てられてある場所とを實地に見させて、どれが好きかと問うた。勿論子供は言下に清潔な市街の甚だ望ましい旨を答へた。

母は丁度その時そこに居合せた市街掃除人夫を指して、市街の清潔は此等勞働者の努力に俟つことの多いことを語り聞かせた上、速に往つてその人夫の勞を謝せよと命じた。子供は市街の不潔な場所と清潔な場所とを實地に比較目擊したので、これによつて得た實感の下に、母の命令が道理に適つてゐると信じて喜んで人夫の許に走つていつて、丁寧にその勞を謝した。

ところがその人夫は、あまりに突然なこの可憐な少女の謝辭が、果してなんの理由によるかを知るに苦しんで、暫くこれに答へることを躊躇したが、母が子供の麗しい考を補足說明したので、漸くこれを理解した。

この人夫は新來のイタリー人で、糊口のために、このやうな穢くて苦しい肉體勞働に從事してゐるのであつて、常に己の運命の拙いことを慨き、時には不平を洩すことさへもあつた。即ち己はかゝる賤業に服して、終日營々と

言下　一言のもと。
勞　ほねをり。
謝す　禮をいふ。
目擊　見る。
突然　だしぬけ。
躊躇　ためらふ。
補足　おぎなひたす
糊口　口すぎ。
賤業　いやしい仕事
營々　はたらく形容

して働いても、十分妻子を養ふことが出來ないのに、掃除された街路を我物顔に濶歩する紳士淑女は、居ながらにして巨万の收入を得て、安逸贅澤な生活を送つてゐるのを面のあたり見て、自己の不運と社會の不公平とを深く怨んでゐたのだつた。しかるに、今突然可憐な少女の心をこめた挨拶に接して、靦然として大悟した。即ち街路掃除のやうな穢くて苦しい肉體勞働でも、單に貧しい一家の生活を支へるためだけの仕事に止らないで、多數市民の健康を保持して、その活動を助成する社會公共の貴い業務であることを知つたので、少女に對して感謝の熱い涙を流し、そして母なる人に深い感激の意を述べて、今日只今から社會の有機的の一員として生きようとする旨を誓つた。

この話は現代に於ける我が社會生活の上に大なる教訓を與へる。第一、母なる人の子供に對する教養の方法が巧妙であるばかりでなく、街路散歩の間にも、常に子女のために活きた教訓を與へようとする熱心は深く敬慕すべきである。

濶歩　道も狹いやうに肩そびやかして歩く
靦然　ひるがへるさま。
大悟　大いにさとる
一員　一人。
巧妙　上手。

こゝに於てか、維新以來動もすれば衰退しようとしてゐる我が國家庭教育の實情に照して、深い反省を國民に求めねばならない。人の生立には、もとよりその家の系統や資產の大切なこともさることではあるが、古來氏より育ち」といふ諺のある通り、家庭の教養がどれだけ重大な關係を有つものであるかは、今更論ずるにも及ばないことで、結局一生の運命は實にこゝに胚胎するのである。かゝる重大な意味のある教養が疎かにされゝば、その家庭からは決して正しい人の出ようはずがない。

歐米文明國の家庭に於ては、概ね宗教的陶冶を中心として、家庭的精神の樹立に深い注意と努力とを拂つてゐる。その國々の人々が、個人としても、また社會の一員としても、いづれも麗しい性情と正しい行爲とを有するのは、全く彼等の家庭教育にその根源を求めるべきであつて、社會生活の整頓した狀態も、またその基礎をこゝに置いてゐるのである。前述の婦人の少女に對する教育上の注意と努力とは、偶〻その一例に過ぎないのである。我が國に於ても、家庭の主婦は勿論、總べての家族がかゝる家庭教育の意義を理

生立　成長。
結局　つまり。
胚胎　きざす。
陶冶　教養。
樹立　立てること。
基礎　もと、いしずゑ。

解して、幼い子女の上に將來幸福多かれと祈る心掛があつて欲しい。

七　鍵の國障子の國

河上肇

「西洋人の生活を何かに纏めて、掌の上に載せて見せよ。」と註文されゝば、私は鍵を出して示さうと思ふ。始めてブリュッセルの素人下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて部屋に入ると、その戸を內から閉ぢるために鍵がある。北側に窓があつて、その窓にもまた鍵がある。一度此等の鍵を下したならば、誰も部屋の中に入つて來られぬことになつてゐる。

此等の鍵を見て、道理からいへば、私は安心せねばならぬのであるが、實際はむしろ薄い不安と淺い危惧とに襲はれた。戸棚がある、勿論戸に鍵があり、抽出に鍵がある。洗面台の下に四段の抽出がある、一々それに錠が拵へてある。机にも抽出がある、それにもまた錠が拵へてある。およそ開閉の出來るものに、特別の鍵の裝置のないものは全くないのである。郵便を一つ

河上肇　山口縣の人、明治十二年生、經濟學者、法學博士、京都帝國大學教授
掌　手のひら。
ブリュッセル　ベルギーの首府。
危惧　危みおそれること。
裝置　しかけ。

入れに出る。歸る時には、必ず鍵を出して錠を外さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、その大戸に內から錠を下す。鍵がなくては、外からはどんなにしても開かぬ戸であるが、なほ用心のために、更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から鍵を入れて、一回半廻さぬと戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は、この大戸の鍵の用法について、容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿の某君は嘗て鍵を忘れて、遂に一夜をホテル(Hotel)で明したことがあるといふ。

パリに來て、始めて西洋の旅館に泊つた。私の部屋は、戸を閉ぢると、鍵がなければ外からは開けられぬ。それだのに、內からまた錠を下すために、別の鍵が備へつけてあつた。

西洋は個人主義の國である。それゆゑ、厚い煉瓦の壁で部屋を圍み、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、蟄居する時には、どうしても窺ふことが出來ぬやうにしてある。いかに親しい間柄のものでも、他人の室に入るには、まづ戸を敲く。すると、內にゐる人が、「入れ。」と應じる。その聲を聞くまで

ホテル　旅館。

蟄居　とぢこもつてゐる。

は、今呼んだ下女でも、決してその戸を開けぬのである。

日本は家族主義の國である。そして、日本の家族主義が西洋の個人主義と甚しく差異がある如く、日本人の住居の樣子は、甚しく西洋人のそれと相違してゐる。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一重の障子で部屋を圍んでゐる、出入自由である、共同主義である。たとひ一軒の家が五室になつてゐようと十室になつてゐようと、實は一室の家である。五室・六室乃至十室の部屋が、離れるやうで卽くやうで、茫然・漠然と自ら一家を成してゐるのが日本の家である。この家は實に日本獨得のものである。夫婦を始め家族一般、相倚り相信じて一體を作し、その間に一點の祕密をも存せぬところが、日本の家族といふものの精神である。

この精神を建築で現せば、卽ち日本流の家屋になる、錠を下した戸の代りに、紙で貼つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。しかし、例へばパリの眞中にそんな家を造つても、これに住まひ得るパリ人がゐない。西洋人は室を有つてゐる。しかし、西洋には家がない。家を有つてゐ

茫然　ぼんやり。
漠然　ぼんやり。

るのは、今日の世界文明國中、日本人だけである。

新制女子國語讀本巻五終

同字一覧

（こゝに同字といふのは、一般に略字・俗字・訛字・同字・慣用字などといつてゐるもの一切を包括したものである。＊印の附けてあるのは、元來別字であるが、今日は同字として廣く用ひられてゐるものである。）

万	両	壱 壹	参 參	串*	丈	丑	丗	乗	乱	弐 貳	亘*	亜	仍	但*
萬	兩	一	三	弗	丈	丑	世	乘	亂	二	亙	亞	仍	但
佞	俟	傚	倚	体* 躰 軆	僣*	仏	仮	傲	仐	会 会	今	令	仝 仝	並 並
佞	竢	倣	倚	體	僭	佛	假	傲	傘	會	今	令	同	竝
辛*	亡	内	京	免	兎	円	冊 冊 冊	冐	冨	冥	决	况	准 凖	凉
辛	亾	內	京	免	兔	圓	冊	冒	富	冥	決	況	準	涼
减	滅	冲	凡 凢	凾	刄	剪	苅	别	劔	剏	刘	効	労	勲
減	滅	沖	凡	函	刃	翦	刈	別	劍 劒	創	劉	效	勞	勳
励	勧	势	勅	匂	夘	即	却	疋	区 區	兼	卑	卆	恊 協*	厨
勵	勸	勢	敕	勻	卯	卽	卻	匹	區	兼	卑	卒	協（ケフ）	廚
厩 廐	厠	厮	厚	双	収	叟	叙	唇*	器	囬	罒*	口 国	囲	図 圖
廏	廁	廝	厚	雙	收	叟	敍 敘	脣	器	回 囘	四	國	圍	圖
叶	囓	呌	去*	吉	告	呈	含	咏	負	善	甞 嘗	阪 坂	塲	塩 壒
協（カナフ）	齧	叫	云	吉	告	呈	含	詠	員	善	嘗	坂	場	鹽
塚* 塚	墻	壮 壯	夛	梦 夣	夹	竒	奨	牂	獘 獘	奥 奧	姫*	妍 妍	妊	嬪 嬪
塚 冢	牆	壯	多	夢	夾	奇	奬	奘	弊	奧	姬	姸	姙	嬪
嫩	姉	孝 学	寇 冦	実	宝 寳	賔 賓	害	写 冩	尅	尋	対	帽 帽	并	屆*
嫩	姊	學	寇	實	寶	賓	害	寫 寫	尅	尋	對	帽	幷	屆

肅 戸 聽 聯 賀 恥 羹 羹 群 羨*羈 罰 繩 絹 縒 糸*縛 帋 綵 總 網
婿 羹 惣

肅 聲 聽 聯 壻 恥 羹 羹 羨 羈 罰 繩 絹 繼 絲 紲 紙 裸 總 網

夢 崩 莽 蔭 荒 華 船 鹽 艷 舍 館 鋪 臺 致 臥 腦 胄 胸 膝 腸 脈

蝿 蛮 蚤*蛎 虫*螟 螳 虱 蚤 蟲 虜 虎 虜 虎 肩 戸 葛 蓉 甍 蔦 羹 蓋 蓋

蝿 蟹 蟹 蝿 蟲 蔓 蟷 蝿 螢 蛩 虜 虜 虎 處 虎 蘆 萬 杏 蘇 蓙 蓋

諂*諛 諛 護 証*諡 訖*讎 讖 托*記 解 規 覽 霸 西 襟 紙 裏 衛
解

諂 諛 讀 護 證 諡 詫 讐 讖 記 記 解 規 覽 霸 西 襟 紙 裏 衛

輩 軌 輙 軈 躯 船 跡 躊 溪 貪 負 頼 賓 贊 犯 豹 象 豊 讃 諫 譯

釈 采*配 医 隣 郷 郎 撰*遊 逸 辿*辺 迂 逓 過 達 辰 弁 辭 弁
鑒

釋 采 配 醫 鄰 鄕 郎 遷 遊 逸 迄 辺 逓 過 達 辰 辯 辨 辭

雛 襍 国 厂 陋 陰 隙 隔 陷 関 閧 間 鑒 戔 錆 鍋 鉄 針 釜
雜 雛 雁 鐵

鶏 雛 雖 隔 陀 陰 隙 隔 陷 関 閧 間 鑑 錢 鏽 矛 鍋 鐵 鍼 釜

鰐 隼 鑄 鬪 髮 駅 馹 駈 駆 馬 發 余 顛 頃 类 頗 韵 肯 吳 霊 隷
駆

鯉 魚 巒 闘 鬚 驛 驢 駆 馬 餐 餘 顛 顯 頗 韻 青 靈 隷

亀 苞 齡 歯 斎 斉 荒 蛾 黽 黄 麻 麺 麦 厳 廉 鶴 鵝 烏 鳥
龍 厳

龜 龍 齡 歯 齋 齊 鼠 鼓 黽 黄 麻 麪 麥 厳 廉 鶴 鵝 烏 鳥

儷 徑 微 往 彦 彝 彙 弯 弥 弼 菴 廩 嵒 崖 峯 戟 岳 屡 屬
徑 弼 嵒 崖

御 徑 微 往 彦 彝 彙 彎 彌 彊 庵 廩 崖 嶋 島 峰 峨 嶽 屢 屬

拘 戲 戟 恋 悃 悅 懷 応 愁 懺 憩 恒*慙 慍 志 忘 従 權 彿 彷
戲 慙 態 從 从 驩 髣

拘 戲 戟 戀 櫂 悅 懷 應 愁 懺 憩 恆 慚 慍 志 忘 從 權 彿 彷

旨 晉 昂 斑 欠 奕 敷 散 教 改 改* 蹉 捐 拳 攀 携 担*扣 払 拝 挿 扳
旣

旨 晉 昂 旣 文 變 數 散 敎 改 蹉 捐 擧 攜 擔 控 拂 拜 插 拔

粂 栖 朴 樞 槁 桿 恭 粂 柿 村 楕 桿 朽 曾 居 曷 者 暦 昼
槪 裴

粂 栖 朴 樞 槁 桿 恭 柿 村 楕 桿 朽 曾 居 曷 者 暦 昼

兇 條 棲 樸 鬼 鬼 槭 棋 桜 柿 邨 楕 杆 朽 曾 書 曷 者 暦 晝

气 氷 毒 殲 歿 歿 歩 飯 歸 歷 欠*桧 柳 椙 槁 様 柩 鎗*栄 朽
気 歿 歸 柳 槁

氣 氷 毒 殲 歿 死 歩 歸 歷 欠 檜 柳 棡 槁 樣 樞 槍 榮 朽

烙 篠 沢 湿 浜 澁 溯 遡 滌 湧 酒 浤 没 渊 泪 浅 温 汗 潜 潤 涅
焼

烙 篠 沢 湿 濱 澁 溯 遡 滌 湧 酒 浤 沒 渊 泪 淺 温 汗 潛 潤 涅

鎔 焔 澤 濕 濱 澁 泝 滌 涌 灑 法 沒 渊 涙 淺 温 汚 潛 闊 涅

当 畠 丁 瑣 珎 献 猟 独 尓 爲 爭 無 黒 炉 灯 熙 羹 冬 灰 煙
晋 早 猟 爲 鬥

当 畠 雷 瑣 珎 献 猟 獨 爾 爲 爭 无 黑 爐 燈 熙 煮 炎 灰 烟

留 畑 町 頊 珍 獻 獵 獨 爾 爲 爭 无 黑 爐 燈 熙 煮 炎 灰 烟

祇 礼 祓 研 碍 確 咄 眄 看 睹 尽 盗 発 痴 当 異 畧 亞 畝
祷 豊 盡 圖 畝

祓 禰 祓 研 礙 確 咄 眄 看 覩 盡 盗 發 癡 當 畫 異 略 畝

糺 繩 繊 紀 糀 穀 糧 笄 簒 籤 笑 競 竈 窓 窮 窃 称 稱 穉 秘

糾 繩 纖 紀 麹 穀 糧 笄 簒 籤 笑 競 竈 窗 窮 竊 稱 稚 秘

別字一覽

左の文字は全然別字である。＊印を附けた文字は今日同字として廣く用ひられてゐる。

＊亙わたる	亘桓に同じい	＊屆屆あな	屆いたる
＊体あらい	體からだ	易やすい	易陽の古字
＊但たゞし	伹拙い	刺そしる	刺もとる
＊僭みだり	僭身分を越えておごる	さす	
刃やいば	刃きず	＊糾あざなふ	糾告げる
叉こまぬく	叉爪の古字	＊台語に用ひる	臺うてな
＊云産む	云いふ	壺つぼ	壺みち
支うつ	支さゝふ	＊糸細い糸	絲いと
壬ぬきでる	壬みづのえ	＊頤みる	頤おとがひ
刋きる	刊けづる	＊賣うる	賣てらふ
＊協おびやかす	協かなふ	彊つよい	疆さかひ
＊四よつ	皿あみ	錬くさび	錬きたふ
糸細い糸	系つゞ	褻かされごろも	褻けがれる
＊串うがつ	弗くし	＊月つき	月肉づき
＊辛からい	辛つみ	＊欹なげく	敧そばだつ
肓むなさき	盲めくら	＊虫魚介の總稱	蟲むし
＊冑かぶと	冑よつぎ	傅かしづく	傳つたへる
兎ゆるす	兎うさぎ	掾たすけ	椽たるき
		登たかつき	登のぼる

＊西おほふ	西にし	冠かんむり	寇あだ
＊詫わびる	詫あざむく	＊槍やり	鎗の形容
＊詔へつらふ	詔うたがふ	浙江の名	浙ぐ
＊証いさめる	證しるし	陝せばい	陝（陝西）
＊豊禮の古字	豐ゆたか	俳たはむれ	俳立ち休む
＊迄まで	迄行く	＊後ろ、あと	后きみ
虻みづち	虻やくし	班わかつ	班まだら
＊妹いもうと	妹（人の名）	訢欣に同じい	訴うつたへる
門かど	門たゝかふ	商あきなふ	商もと
＊劵わりふ	劵つかれる	祇地の神	祇つゝしむ
＊姫つゝしむ	姫ひめ	＊羨地名	羨うらやむ
＊托ひらく	託たのむ	鍛きたへる	鍜かぶと
＊担おすはらふ	擔になふ	藉席	籍書
＊担あげる		＊選えらぶ	撰纂する
＊改神の名	改あらためる	郤ひま	郤しりぞく
＊負おふ	貟神の名	＊塚ちり	塚つか
苗なへ	苗あじか	毋なかれ	毋つらぬく
段きれ	叚かり	已おのれ	已すでに
＊欠あくび	缺かく		已やむ
			已み

大正十一年十月二十七日　印刷
大正十一年十月三十日　發行
大正十二年一月　四　日　訂正再版印刷
大正十二年一月　七　日　訂正再版發行

新制女子國語讀本　定價
卷一——四　金四拾壹錢
卷五——十　金四拾錢

臨時定價　大正十三年度
金二十七錢

著作者　開成館編輯所
發行兼印刷者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地　株式會社　東京開成館　代表者　渡邊良助
西部販賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

發行所　東京市小石川區小日向水道町八四　振替貯金口座東京第五參貳貳番　株式會社　東京開成館

東京　株式會社　精義堂　印刷

著作權所有

三年口組

田坂 三サコ